



© Zdeněk Chalabala / Prague Spring Festival

# パーヴォ&N響コンビのさらなる進化に期待 首席指揮者として迎える4シーズン目開幕

## 選曲の妙

マーラーを主軸にくりひろげるプログラム

パーヴォ・ヤルヴィがNHK交響楽団の首席指揮者に就任して、4年目のシーズンの開幕である。

信頼関係もいよいよ深まってきたこのコンビのレパートリーの重要な柱は、マーラーの交響曲だ。2015年2月の《交響曲第1番「巨人」》と、同年10月の首席指揮者就任記念定期公演での《第2番「復活」》の名演は、まだ記憶に新しい。以来、《第8番「一千人の交響曲」》《第3番》《第6番「悲劇的」》《第7番「夜の歌」》と、6曲を演奏している。

今回のAプログラムで取りあげられる《第4番》は、マーラーの交響曲のなかでも牧歌的、叙情的な性格をもつ曲である。1897年に念願のウィーン宮廷歌劇場音楽監督に就任、指揮者としても精力的な活動をくりひろげた時期の作品だ。この曲の前に、同時代のウィーンを象徴する音楽である、ヨハン・シュトラウス二世のワルツなどを並べる選曲も、じつに面白い。マーラーは宮廷歌劇場で上演するための《バレエ「灰かぶり姫」》をシュトラウスに依頼したが、残念ながら完成をみることなく、1899年にシュトラウスは亡くなっている。マーラーの《交響曲第4番》の作曲が始まったのは、まさにその年のことなのである。

そのマーラーよりも半世紀以上前にウィーンで活躍したハイドン、ベートーヴェン、シューベルトの作品が並んでいるのが、Bプログラムだ。いうまでもなく、かれらの音楽もマーラーに大きな影

今月のマエストロ

# パーヴォ・ヤルヴィ

## Paavo Järvi

文◎山崎浩太郎 | Kotaro Yamazaki

響を与えた。

一方、R. シュトラウスの《ホルン協奏曲第2番》は1942年に書かれた作品だが、マーラーより4歳下のR. シュトラウスは、互いに刺激を与えあったよきライバルだった。そして晩年のこの作品は、ウィーンに生きた音楽家としてやはり欠かすことのできない天才、モーツァルトの影響を想起させる。このように、AとBの両プログラムは2つ合わせて、「音楽の都」ウィーンを強く意識させる選曲となっている。

## 自身の生地とのつながりを意識した 記念すべきプログラム

Cプログラムはがらりと雰囲気を変えて北欧に飛び、シベリウス・プログラムとなる。シベリウスの母国フィンランドは、パーヴォの生地エストニアとは、バルト海をはさんでとなりあっている。スウェーデンなども含めて、これらバルト海沿岸諸国は一衣帯水の関係に結ばれ、文化の交流もさかんだ。

パーヴォの父ネーメの活躍は、その結びつきの深さを体現している。かれが指揮者として名をあげたのは、1980年代にスウェーデンのエテボリ交響楽団の首席指揮者をつとめて、シベリウスの交響曲など北欧音楽を中心に、レコーディングしたのがきっかけだった。

パーヴォ自身も指揮者デビュー以来、ノルウェーやスウェーデン、フィンランドのオーケストラと密接な関係を保つと同時に、エストニアではバルト海に面したリゾート地パルヌで、2011年から毎年夏に

音楽祭を開催している。

今年が建国100周年となるエストニアから、国立男声合唱団を招いて演奏するシベリウスは、互いの文化と歴史に敬意を払い、尊重しあう、バルト海の国々の交流を象徴する響きとなるだろう。

[やまざき こうたろう／音楽評論家]

## プロフィール

今年9月にNHK交響楽団首席指揮者として4シーズン目に入るパーヴォ・ヤルヴィは、これまで重点的に採り上げてきたドイツ・ロマン派や北欧の作品に加えて、新たに古典派やストラヴィンスキーに取り組み。その挑戦する姿勢は、発信力の強さと相まって、N響のみならず、日本のオーケストラ界全体にとって大きな刺激となっている。N響とは、録音の分野での成果も目覚ましく、2016年度には「レコード・アカデミー賞」を受賞した。今年8月には最新作『ムソルグスキー：展覧会の絵 & はげ山の一夜』がリリースされた。一方、海外活動では、2017年にヨーロッパ6か国7都市を回るツアーを大成功に導き、N響の国際的な評価を高めた。

エストニアのタリン生まれ。現地で打楽器と指揮を学んだ後、アメリカのカーティス音楽院で研鑽を積み、バーンスタインにも師事。シンシナティ交響楽団音楽監督、hr交響楽団首席指揮者、バリ管弦楽団音楽監督などを歴任。現在は、ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団芸術監督、エストニア祝祭管弦楽団芸術監督兼創設者などを務める。2019/20年シーズンからはチューリヒ・トーンハレ管弦楽団の音楽監督兼首席指揮者に就任予定。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団などの名門オーケストラにも客演し、現代を代表する指揮者のひとりとして、世界で活躍している。

PROGRAM

A

第1891回

NHKホール

9/15 [土] 6:00pm

9/16 [日] 3:00pm

指揮 | パーヴォ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.11

ソプラノ | アンナ・ルチア・リヒター\*

コンサートマスター | 篠崎史紀

ヨハン・シュトラウス二世  
喜歌劇「こうもり」序曲 [9']

ヨハン・シュトラウス二世  
ワルツ「南国のぼら」作品388 [9']

ヨハン・シュトラウス二世  
ポルカ「クラブフェンの森で」作品336  
[5']

ヨハン・シュトラウス二世  
皇帝円舞曲 作品437 [12']

ヨーゼフ・シュトラウス  
ワルツ「うわごと」作品212 [8']

—— 休憩 ——

マーラー  
交響曲 第4番 ト長調\* [54']  
I 落ち着いて、急がずに  
II ゆったりとした動きで、慌てないで  
III 安らぎに満ちて: ポーコ・アダージョ  
IV 非常にくつろいで

## Artist Profile

### アンナ・ルチア・リヒター (ソプラノ)



ドイツのソプラノ。ケルンの音楽一族に生まれる。父はヴァイオリン奏者、母はアルト歌手。9歳から母に歌を学ぶ。2013年にケルン音楽大学の専門課程を修了。2012年にはドイツ、ツヴィッカウでのローベルト・シューマン国際コンクールの女声部門で第1位を受賞。2014年3月、ロンドンのウィグモア・ホールでのリサイタル、同年10月、ニューヨークのパーク・アベニュー・アーモリーでの3回のリサイタル(米国デビュー)共に大成功を収める。2015年7月にはザルツブルク音楽祭に初出演。近年はリサイタル、演奏会、そしてバロックから現代までのさまざまなオペラで幅広く活躍している。卓越した発声、透明で瑞々しい美声、優れた知性を感じさせる歌い口、そして節度ある情熱とが理想的に結び付き、リヒターの歌は聞く者をたちど

るに惹き付ける魅力に満ちている。マーラーの《交響曲第4番》の独唱は、2015年9月、ベルナルト・ハイティンク指揮ロンドン交響楽団の来日公演でも歌っている得意の演目。NHK交響楽団とは今回が初共演。

[吉田光司／音楽評論家]

## Program Notes | 小宮正安

軽やかな娯楽音楽の代表格であるヨハン・シュトラウスII世(1825~1899)とヨーゼフ・シュトラウス(1827~1870)のシュトラウス兄弟。かたや世界苦を一身に背負ったかのような交響曲を書いたグスタフ・マーラー(1860~1911)。だがそんな水と油の関係にも思える彼らは、実のところ「世紀末ウィーン」という点で密接に関わっている。

### ヨハン・シュトラウスII世

## 喜歌劇「こうもり」序曲

「ワルツ王」の異名で親しまれているヨハン・シュトラウスII世だが、彼は1870年代に入ると、ダンス音楽で培ったノウハウを基にしながら、喜歌劇の世界に乗り出すようになる。《こうもり》は、そんなヨハンの喜歌劇第3作目。倦怠期を迎えたブルジョア夫婦が、互いにそうとは知らず舞踏会に呼ばれて、騙し騙されの喜劇的恋愛を繰り広げるという、一見たわいもないストーリーだ。だがその裏側には、作品が誕生する前年の1873年、都市改造や万国博覧会に沸くウィーンを襲った株価大暴落事件が影を落としている。

予想外の事件に意気消沈するウィーン市民。そんな彼らに元気を与えるべくして書かれたのが、《こうもり》に他ならない。劇中で歌われる「忘れられればそれで幸せ／変えようのない人生ならば」という歌詞は、それを端的に象徴している。

序曲は、この作品の特徴である刹那的な愉悦と、その裏側に潜むぐたいメランコリーを色濃く抽出したものとなっている。特に序曲の冒頭部分で、喜歌劇の中核を成す舞踏会の終わりを告げる鐘がすでに鳴らされるあたり、刻々と過ぎゆくすばらしい時間に対する追慕の情が滲み出ているとは言えないだろうか。

なお《こうもり》に大きな愛着を抱いていたマーラーは、19世紀末に自らがウィーン宮廷歌劇場の総監督になった後、喜歌劇は上演しないというこの劇場で、一部の猛反対を押し切って、当作品の上演を行っている。

作曲年代	1874年
初演	1874年4月5日、作曲者自身による指揮、アン・デア・ウィーン劇場
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、テューブラー・ベル、弦楽

## ヨハン・シュトラウスII世

## ワルツ「南国のばら」作品388

喜歌劇に進出して以降のヨハンは、自作の喜歌劇のなかに登場する楽曲をつなぎ合わせ、それを新作のダンス音楽として発表することが多くなっていった。《ワルツ「南国のばら」》もそのひとつで、彼の第7作目の喜歌劇である《女王のレースのハンカチーフ》に登場するメロディを基としている。ヨハンが作ったほとんどの喜歌劇の例にもれず、当喜歌劇そのものは忘れられてしまって久しいが、そこから編み出されたダンス音楽はその後も人気を博し続けており、《南国のばら》もその一例にほかならない。

曲名は、このワルツがイタリア国王ウンベルトI世(1844~1900)に献呈されたことに由来する。経緯としては、ウンベルトI世が《女王のレースのハンカチーフ》を気に入っていることを伝え聞いたヨハンが、同作品に基づいて新たにワルツを作り、イタリアを想起させる題名に仕立て上げた。喜歌劇中に登場する三重唱〈野ばらが花咲くところ〉が、当ワルツに採り入れられている点も、この曲名が誕生した背景にあるだろう。

優美ではあるものの、そこはかかない哀愁が漂う。これは、シュトラウス兄弟のワルツの特徴だが、当時の彼が置かれていた状況も、華やかな曲名を戴く本作の裏側に濃い影を作り出したといえないだろうか。1878年、ヨハンは1人目の妻の死から程なく、25歳も年下の女性と電撃結婚するも、ふたりの関係は早々に悪化。やがては妻の駆け落ち騒動にまで発展する一触即発の状況のなかで、麗しき《南国のばら》は花咲いた。

作曲年代	1880年
初演	1880年11月7日、エドゥアルト・シュトラウスI世指揮、シュトラウス管弦楽団、ウィーン楽友協会
楽器編成	フルート1、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、小太鼓、トライアングル、大太鼓、シンバル、ハープ1、弦楽

## ヨハン・シュトラウスII世

## ポルカ「クラップフェンの森で」作品336

ウィーンを活動の中心地としていたヨハンだが、この街での仕事が減る夏のバカンス・シーズンには(ダンス音楽の作曲家であった彼にすれば、舞踏会が頻繁に開催される冬の謝肉祭シーズンこそ稼ぎ時であり、その逆で夏は大きな収益を見込めなかった)、ロシアのパヴロフスクへ毎年のように演奏旅行をおこなっていた。そして彼の地で催す演奏会に際しては、毎回のように新曲をお披露目し、聴衆の心をわしづかみにしていったのだった。

本作は、そんなパヴロフスクでの演奏会のために書かれた作品。もとは「パヴロフスクの森で」というタイトルが付いていたが、帰郷後ウィーンでも上演するにあたって、現在のものへと改めた。「クラップフェンの森」とは、ウィーン西部に広がるウィーンの森の一部

の名前であり、またそこに店を構える山小屋風レストランの名前としても知られていた。

曲は、ポルカ・フランセーズ(フランス風ポルカ)の様式で書かれている。ポルカとは元来、チェコ西部のボヘミアで盛んだった、弾むような2拍子の民族舞踊。だが、ウィーンを都とするハプスブルク家がボヘミアを含む巨大な領土を中央ヨーロッパ各地に有していたこともあり、ウィーンでもポルカは人気のダンス音楽となってゆく。しかもそこへさまざまなアレンジが加えられてゆくわけだが、そのひとつこそがゆったりとしたテンポに乗り、優美な旋律が紡ぎ出されるポルカ・フランセーズだった。

作曲年代	1869年
初演	1869年9月6日、作曲家自身による指揮、バヴロフスク、ヴォクソール・バビロン
楽器編成	フルート1、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット1、Dクラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、カッコウの鳴き声の笛、鳥笛、小太鼓、弦楽

## ヨハン・シュトラウスII世

### 皇帝円舞曲 作品437

こちらも、もとは「手に手を取って」という曲名が付いていたが、ベルリンのジムロック社が出版にあたって強く要請し、《皇帝円舞曲》と改められた。

ベルリンとウィーン。この2つの都市は、ことヨハンの生きた時代にあってはライバルなどという生やさしい言葉では括りきれない、敵同士だった。それが噴出したのが、ドイツ統一に際して誰がイニシアチブをとるのかという問題をめぐり、ベルリンを首都とするプロイセン王国と、ウィーンを首都とするオーストリア帝国が1866年に戦争を交えた事件である。結果はプロイセンの大勝に終わり、オーストリアはドイツ統一の動きから排除されるだけでなく、プロイセン率いる強大なドイツ帝国の影に置かれ続けることにもなった。

それでもやがて、バルカン半島に勢力を伸ばすロシア帝国を警戒するという点で両国は一致。かつての<sup>おんしゆ</sup>恩讐を超え、一応は友好関係が築かれる。そうしたなかで、ベルリンに完成した総合娯楽施設「ケーニヒスバウ」の<sup>こけらお</sup>柿落としを記念してヨハンが新たに書き下ろしたのが《ワルツ「手に手をとって」》つまり《皇帝円舞曲》だった。鉄の規律を誇る軍隊で知られたプロイセン風の行進曲を<sup>ほうふつ</sup>彷彿させる前奏に、オーストリアの中心地ウィーンで花咲いたワルツが続く。

この小品に脈打つ<sup>たそがれ</sup>黄昏の色合い。それは、晩年に近づきつつあったヨハン自身の、あるいは落日の時を迎えつつあったオーストリアの、最後の<sup>こうぼう</sup>光芒だったのか。

作曲年代	1889年
初演	1889年10月21日、作曲家自身による指揮、ベルリン、ケーニヒスバウ
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、シンバル、大太鼓、小太鼓、ハープ1、弦楽



ヨーゼフ・シュトラウス

## ワルツ「うわごと」作品212

ヨハンの弟であるヨーゼフ・シュトラウスは、人気ダンス作曲家として多忙をきわめ身体をこわしかけた兄のピンチヒッターとして、工学技師のキャリアを投げ打ってこの世界に入り、やがてヨハンと並ぶ人気を得るようになった。

《うわごと》は、1867年の作品。先述したとおり、1866年にオーストリア帝国はプロイセン王国と戦い、敗れ去る。首都のウィーンは敗戦の報に沈み、翌年の舞踏会シーズンは一挙に冷え込んだ（なお、そんなウィーンっ子を励ますべく兄ヨハンが作ったワルツこそ、《美しく青きドナウ》である）。こうした状況のなか、医師たちが主催する医学舞踏会は例年のように開かれ、新作のダンス音楽もヨーゼフに委嘱されたのだが、そこで彼に示されたお題こそ、暗い世相を反映した「うわごと」。ヨーゼフもそれに応え、舞踏会で踊られるワルツのイメージを裏切るような、陰鬱で幻想的な序奏のついた曲を書き上げた。

19世紀後半になると、シュトラウス兄弟のワルツは、踊るためのみならず、交響曲あるいは交響詩をも彷彿させる、聴く作品としての様相を帯びてゆく。特にヨーゼフは、「ワルツのシューベルト」と呼ばれるほどの叙情的な作風を得意としていた。そうした彼の特徴がもっとも鮮やかにあらわれたのが、本作ではなかったか。

作曲年代	1867年
初演	1867年1月22日、作曲者自身による指揮、ウィーン、ゾフィエンザール
楽器編成	フルート1、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、小太鼓、ハープ1、弦楽

マーラー

## 交響曲 第4番 卜長調

グスタフ・マーラーが書いた交響曲のなかでは、比較的短め。彼の作品のなかでは愛らしく親しみやすいとも考えられがちな1曲だが、果たしてそうだろうか。

マーラーは1890年代、ドイツ・ロマン派の詩人として知られるアヒム・フォン・アルニム（1781～1831）とクレメンス・ブレンターノ（1778～1842）による詩集『こどもの不思議な角笛』（以下『角笛』と略）所収のいくつかの詩に基づいて歌曲を手がける。そのなかで1892年に作られたのが歌曲《天上の生活》。この曲は詩集『角笛』に基づく他の4曲とともに、1893年に《フモレスケ》というタイトルで初演され、やがては《フモレスケ交響曲》という作品の最終楽章に配置するという考えにまで発展する。

結局のところ《フモレスケ交響曲》そのものが実現することはなかったのだが、構想されていた《フモレスケ交響曲》の第1楽章（永遠の現在としての世界）と第3楽章（至高の愛）が

《交響曲第4番》の当該楽章の基になった、とする見方が一般的である。

ところで「フモレスケ」とは何か。英語であれば「ユーモア」に当たる言葉だが、単におかしさだけではなく、喜びや悲しみ、愛や憎しみといったさまざまな感情が入り混じり、時に「ブラック・ユーモア」にも転じる可能性を秘めている。まただからこそ、《フモレスケ交響曲》の流れを組む《交響曲第4番》も、一筋縄ではゆかない。何しろこの作品の発端となった《天上の生活》からして、詩集『角笛』を読めば、どうやらこの世で飢え死にした貧しい子供が、あの世で飽食三昧・贅沢三昧ぜいたくに明け暮れるという内容だからだ。

表面的な陽気さの裏側に、拭いがたい影が付きまとう——。これは本プログラム前半のシュトラウス兄弟の作品とも通じ合う世界観だ。しかも、全体としては古典的な4楽章構成のつとに則りながらも、この構成を完成させたベートーヴェン的な世界、つまり苦悩を通じて勝利へ至るといった道筋を期待していると、ものの見事に裏切られる。なにしろ本作の結論部分ともいえる第4楽章は、先ほど解説した《天上の生活》なのだから。

そうすると、鈴の音に導かれて始まる、感傷的かつ牧歌的な第1楽章からして、見た目は裏腹にその内実はきわめて複雑だ。じっさい、時折顔を見せる不吉な楽想は徐々に力を増し、展開部の終わりではすべてが大崩壊へとなだれ込んだ直後、トランペットの葬送シグナルが顔を覗かせる。しかもこのような惨劇のぞがまるで存在しなかったかのように、すぐさま牧歌的な調べがしれっと現れる再現部が始まり、しめくりには陽気などんちゃん騒ぎが繰り広げられる。

第2楽章は、死神のヴァイオリンをイメージした独奏ヴァイオリンが、わざと調子はずれのチューニングで、オーケストラとからむ。3/8拍子のスケルツォだが、シュトラウス兄弟でお馴染みのワルツと同様の3拍子が用いられている点が肝であって、陽気さの裏側で終わりの時が刻々と忍び寄る「死の舞踏」が、ここにも顕著に聞こえている。

第3楽章は、第1楽章の基調を成す感傷的な牧歌の雰囲気がに満ちた長大な変奏曲となっているが、変奏の途中で突如お祭り騒ぎのような場面が姿を現したり、楽章の終わり近くでいきなり第4楽章のテーマが凱歌がのように奏されたりと、目まぐるしい。

そして、「完全に死に絶えるように」と指定された前楽章に続いて、独唱付きの第4楽章が始まる。しかもそこで歌われる「天上の生活」とは、地上の生活の俗をそのまま反映したかのようであり、そこへ第1楽章に現れた鈴の音が時折脅迫観念のように覆い被さる。愛も毒もある、マーラーならではのフモレスケの真骨頂である。

作曲年代	1899～1901年
初演	1901年11月25日、ミュンヘン。作曲者指揮、カイム管弦楽団、マルガレーテ・ミヒャリク(ソプラノ)
楽器編成	フルート4(ピッコロ2)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット3(Esクラリネット1、バス・クラリネット1)、ファゴット3(コントラファゴット1)、ホルン4、トランペット3、ティンパニ1、グロッケンシュピール、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タムタム、スレイベル、大太鼓、ハープ1、弦楽、ソプラノ・ソロ



## マーラー 交響曲 第4番ト長調 歌詞対訳

訳◎檜山哲彦

15 &amp; 16 SEP 2018

## IV

Wir geniessen die himmlischen Freuden,  
 d'rum tun wir das Irdische meiden.  
 Kein weltlich' Getümmel  
   hört man nicht im Himmel!  
 Lebt Alles in sanftester Ruh'!  
 Wir führen ein englisches Leben!  
 Sind dennoch ganz lustig daneben!  
 Wir tanzen und springen,  
 wir hüpfen und singen!  
 Sanct Peter im Himmel sieht zu!

Johannes das Lämmlein auslasstet,  
 der Metzger Herodes drauf passet!  
 Wir führen ein geduldig's,  
 unschuldig's, geduldig's,  
 ein liebliches Lämmlein zum Tod!  
 Sanct Lucas den Ochsen tät schlachten  
 ohn' einig's Bedenken und Achten,  
 der Wein kost kein Heller  
 im himmlischen Keller,  
 die Englein, die backen das Brot.

## 第4楽章

うれしい<sup>たの</sup>愉しい天上の国  
 浮世のことは忘れよう  
 天の国には  
 地上の騒ぎはとどかない!  
 どこもかしこも平穩そのもの!  
 天使のような暮らしぶり!  
 とはいえ、まことに浮きうきわくわく!  
 歌って踊って  
 跳んでははねて!  
 ペーテロさまが見ておわす!

ヨハネスさまが小羊放せば  
 肉屋のヘロデがつけねらう!  
 このおとなしいけがれない  
 このかわいらしい小羊を  
 われらは死なしてしまうのだ!  
 気づかいなどはどこへやら  
 ルーカスさまは雄牛<sup>あや</sup>を殺め  
 天の蔵では  
 酒は無料<sup>ただ</sup>  
 パンを焼くのは天使たち

Gut' Kräuter von allerhand Arten,  
die wachsen im himmlischen Garten!  
Gut' Spargel, Fisolen  
und was wir nur wollen!  
Ganze Schüsseln voll sind uns bereit!  
Gut' Äpfel, gut' Birn' und gut' Trauben!  
Die Gärtner, die Alles erlauben!  
Willst Rehbock, willst Hasen,  
auf offener Strassen  
sie laufen herbei!

Sollt ein Fasttag etwa kommen  
alle Fische gleich mit Freuden  
angeschwommen!  
Dort läuft schon Sanct Peter  
mit Netz und mit Köder  
zum himmlischen Weiher hinein.  
Sanct Martha die Köchin muss sein!

Kein' Musik ist ja nicht auf Erden,  
die uns'rer verglichen kann werden.  
Elftausend Jungfrauen  
zu tanzen sich trauen!  
Sanct Ursula selbst dazu lacht!  
Cäcilia mit ihren Verwandten  
sind treffliche Hofmusikanten!  
Die englischen Stimmen  
ermuntern die Sinnen!  
Dass Alles für Freuden erwacht.

Aus: "Der Himmel hängt voll Geigen  
—Bayerisches Volkslied—"  
in *Des Knaben Wunderhorn*

おいしい野菜は  
庭にいっぱい!  
アスパラ、インゲン  
なんでも揃う!  
眼のまへの皿に山盛り!  
リンゴにナシにブドウもたっぷり!  
庭守りたちは口を出さない!  
シカやウサギが望みなら  
ひらけた道を  
獲物のほうからやってくる!

肉断ちの日は嬉々として  
魚がこぞって  
寄ってくる!  
ほおらごらんよ  
網と餌とを手にもって  
池に踏みこむペーテロさま  
料理はきつとマルタさま!

がく ね  
楽の音というならば  
現世で聞けないものばかり  
数えきれない処女らが  
すすんで踊る!  
ウルズラさまさえつられて笑う!  
ツェツィーリエさまは一族つれて  
じつにみごとな宮廷楽士!  
天使らの歌声は  
身をも心も浮きたたせ  
万物こぞって喜びに沸く!

「天上の国は楽の音にみちあふれ  
——バイエルン民謡——」より  
『こどもの不思議な角笛』所収

PROGRAM

B

第1893回

サントリーホール

9/26 水 7:00pm

9/27 木 7:00pm

指揮 | パーヴォ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.11

ホルン | ラデク・バボラーク

コンサートマスター | 篠崎史紀

### シューベルト

#### 交響曲 第3番 二長調 D.200 [26']

- I アダージョ・マエストローアレグロ・コン・プリオ
- II アレグレット
- III メヌエット: ヴィヴァーチェトリオ
- IV プレスト・ヴィヴァーチェ

### R. シュトラウス

#### ホルン協奏曲 第2番 変ホ長調 [19']

- I アレグロ
- II アンダンテ・コン・モート
- III ロンド: アレグロ・モルト

— 休憩 —

### ベートーヴェン

#### 「プロメテウスの創造物」序曲 [5']

### ハイドン

#### 交響曲 第102番 変ロ長調

#### Hob.I-102 [24']

- I ラルゴー・ヴィヴァーチェ
- II アダージョ
- III メヌエット: アレグロ・トリオ
- IV 終曲: プレスト

### Artist Profile

## ラデク・バボラーク (ホルン)



現代を代表するホルン奏者。並外れた技術の高さと繊細な表現力によって、ホルンという楽器のイメージを変えたといっても過言ではない。

1976年チェコ生まれ。8歳でホルンを学び、プラハ音楽院でペドジフ・ティルシャルに師事。早くも18歳でチェコ・フィルハーモニー管弦楽団首席奏者に就任し、その後ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団首席奏者を経て、2003年から2010年までベルリン・フィルハーモニー管弦楽団ソロ・ホルン奏者を務めた。ベルリン・フィル退団後はソリスト、室内楽奏者としていちだんと旺盛おうせいに活動すると同時に、指揮者としてのキャリアも本格化させ、自ら創設したチェコ・シンフォニエッタを率いるほか、日本では2013年水戸室内管弦楽団定期演奏会に指揮者とし

でデビューを果たした。2018年からは山形交響楽団首席客演指揮者を務める。

N響とは2012年にアシュケナーズ指揮のもとグリエール《ホルン協奏曲》を演奏し、本誌企画「最も心に残ったソリスト2012」で第1位を獲得。2015年にはアンドリス・ポーガの指揮でモーツァルトとR.シュトラウスの《ホルン協奏曲第1番》を演奏している。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

## Program Notes | 広瀬大介

19世紀後半から20世紀前半にかけて、長きにわたって<sup>ため</sup>弛まらずに音楽活動を続けたリヒャルト・シュトラウス(1864～1949)。交響詩とオペラの巨匠が絶対音楽たるソナタや協奏曲を手がけたのは、キャリアの初期と晩年に集中している。これらの様式を確立した古典派の巨匠たち、ハイドン(1732～1809)、ベートーヴェン(1770～1827)、シューベルト(1797～1828)に対して称賛を惜しまなかったシュトラウスが、パーヴォ・ヤルヴィによって組まれた今回のプログラムを見たならば、きっと会心の笑みを浮かべたであろう。

### シューベルト

## 交響曲 第3番 二長調 D.200

フランツ・シューベルトが、作曲家としてその類いまれな天分を発揮しはじめたのは、1815年頃、18歳の時のこと。この時期に作曲されたもっとも有名な曲は、歌曲《魔王》であろう。強い力を内包した詩の世界を、簡潔かつ内容豊かな旋律の力で描き出すその手腕こそ、シューベルトが持つ絶対的な才能の証明に他ならない。

この時期のシューベルトは、アントニオ・サリエリに作曲を師事していた。イタリア人であるサリエリはドイツ歌曲の作曲に<sup>いそ</sup>勤しむ弟子を快く思わず、「メロディを節約した」作品を作るよう望んでいたという。シューベルトも、畏敬の対象としていたベートーヴェン作品の複雑さよりは、ハイドンやモーツァルトの作品に見られる明朗さ、わかりやすさを重視していた。

「1815年7月19日・作曲完了」の日付が付された《交響曲第3番》は、規模の大きな《第2番》に比べると、さまざまな点でスリム化が図られており、実際、シューベルトが作曲した交響曲の中でも、最も短い作品となっている。荘重な序奏に導かれてはじまる第1楽章の主題はさまざまに形を変え、「メロディを節約」するように説いた師の教えと自身の楽想を、いかに調和させるかに苦労している跡が<sup>うかが</sup>窺える。第2楽章に重苦しいアダージョではなく、軽快ですらあるアレグレットを選んだのも、明朗さの表れだろう。第3楽章もメヌエットと題されてはいるが、すでに次代を予感させるスケルツォ的な軽やかさを秘めている。イタリア風の舞曲(タランテラ)を取り入れた第4楽章は、当時ウィーンで大

流行したロッシーニの音楽の影響とも、師サリエリの影響とも言われている。

作曲年代	1815年5月～7月19日
初演	1881年2月19日、ロンドン、クリスタル・パレス、オーガスト・マンズ指揮
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

## R. シュトラウス

### ホルン協奏曲 第2番 変ホ長調

1942年に初演された、15作目にして最後の《歌劇「カプリッチョ」》をもって、リヒャルト・シュトラウスは、作曲家としての公的な活動にピリオドを打ち、それ以降の作品はすべて「手首の運動」と称した。が、もちろんこれはシュトラウス独自の韜晦<sup>とうかい</sup>である。むしろ、《カプリッチョ》によって、旋律の歌わせ方と動機（モチーフ）労作の手法を巧みに結びつける方法を獲得した作曲家は、最晩年の様式を編み出すに至る。

《ホルン協奏曲第2番》の作曲にあたっては、60年前に当代きってのホルン奏者であった父フランツのために作曲した《第1番》を念頭に置いていたと考えて間違いあるまい。本作品は2つの部分から成るが、前半部分はアレグロの第1楽章、アンダンテ・コン・モートの第2楽章に分割できる（両者は切れ目なく演奏される）。変ホ長調の主和音をやさしく積み上げながら上昇するホルン独奏に導かれ、このモチーフを中心としつつも流れるような旋律が紡がれる。第2楽章の最後には《家庭交響曲》からの引用とおぼしき旋律の断片も聞こえてくる。

明瞭な Rond 形式を有する後半部分が第3楽章になるわけだが、この楽章が前の2つの楽章と切り離されているのは、軽快なモチーフの積み重ねによる音楽の構造が、明らかに前半部分とは異なるという理由によるものだろう。とくにこの楽章は、この後に作曲された《オーボエ協奏曲》《変容》に至るまで、晩年様式の基礎を形成している。

作曲年代	不明（《カプリッチョ》の作曲終了後か）～1942年11月28日
初演	1943年8月11日、ザルツブルク、ゴットフリート・フォン・フライベルクのホルン独奏、カール・ベーム指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ホルン・ソロ

## ベートーヴェン

### 「プロメテウスの創造物」序曲

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェンによるオペラ作品は《フィデリオ》1作（しかも3種の版が存在する）、バレエ作品は《騎士のバレエ》と《プロメテウスの創造物》を数えるのみで

あり、いずれも比較的若い時期に書かれたものである。

振付家サルヴァトーレ・ヴィガノーとベートーヴェンが、ナポレオンに比すべき啓蒙主義時代の英雄として人間に芸術と学問を与えるプロメテウスを描く《プロメテウスの創造物》全曲は、《序曲》とそれに続く導入部、16曲の情景から成る。序曲の冒頭、ハ長調の主和音ではなく、不安定な「属七の和音」から始まるのは、《交響曲第1番》第1楽章の冒頭を思い起こさせ、新たな音楽様式の誕生を宣言する。

作曲年代	1800～1801年
初演	1801年3月、ウィーン、ホーフブルク劇場
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

## ハイドン

### 交響曲 第102番 変口長調 Hob.I-102

ヨーゼフ・ハイドンが「交響曲の父」と呼ばれるのには、もちろん理由がある。エステルハーゼ侯爵家に奉職した約30年間に手がけられた数多くの交響曲によって、聴き手が自明のこととして共有するこのジャンルの様式が形成された。

長年にわたって培ってきたハイドンの創意は、パリやウィーンにおいて少しずつ識られるようになっていくが、その人気はロンドンで爆発する。2度の渡英(1791～1792、1794～1795)では6曲ずつ、計12曲の交響曲を披露し、圧倒的な成功を収めるに至った。《102番》は滞在最後の年にロンドンで初演されるが、数々の協奏曲や声楽曲の中で「大序曲」という触れ込みで演奏されたのが目を惹く。交響曲がいまあるような形で定着するようになったのは、ハイドンのさまざまな工夫を聴き取ることのできる、イギリスの聴衆による圧倒的な支持が背景にあったのだろう。

本格的な序奏の後に軽快に始まる第1楽章(変口長調)では、展開部から再現部に入る前にハイドンお得意の「疑似」再現部が置かれ、ウィットに富んだ人柄が<sup>しの</sup>偲ばれる。緩徐楽章となる第2楽章(へ長調)では、3つの変奏を有する変奏曲をチェロの独奏が彩る。第3楽章(変口長調)は優雅なメヌエットと素朴なレントラーが好対照を成し、第4楽章(変口長調)では再現部が短く取られた分、展開部で複雑な対位法的書法が垣間見られ、堂々たるコーダが曲を華々しく締めくくる。新しい時代を切り拓こうとしたハイドンの創意は、多くの後進作曲家たちに受け容れられていくことになる。

作曲年代	1794年
初演	1795年2月2日、ロンドン「オペラ・コンサート」
楽器編成	フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽



PROGRAM

C

第1892回

NHKホール

9/21 金 7:00pm

9/22 土 3:00pm

指揮 | パーヴォ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.11

ソプラノ | ヨハンナ・ルサネン\*

バリトン | ヴィツレル・ルサネン\*

男声合唱 | エストニア国立男声合唱団 (合唱指揮: ミック・ウレオヤ)

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

後援: 駐日エストニア共和国大使館



シベリウス

「レンミンケイネンの歌」作品31-1 [4']

シベリウス

「サンデルス」作品28 [9']

シベリウス

交響詩「フィンランディア」作品26

(男声合唱付き) [8']

— 休憩 —

シベリウス

「クレルヴォ」作品7\* [78']

I 導入

II クレルヴォの青春

III クレルヴォとその妹

IV 戦闘に赴くクレルヴォ

V クレルヴォの死

## ヨハンナ・ルサネン(ソプラノ)



フィンランドのクオピオ生まれのソプラノ。ヘルシンキのシベリウス・アカデミーで学ぶ。1996年、ラッペーンランタ国際声楽コンクールの女声部門で優勝。1998年から2年間、ベルリン・ドイツ・オペラの育成プログラムでさらに研鑽を積む。力強く温かみのある歌声で近年はドラマチックなソプラノ役を手掛け、2013年11月、フィンランド国立歌劇場でプッチーニ《トゥーランドット》のタイトルロールを、2016年5月には同歌劇場でワーグナー《トリスタンとイゾルデ》のイゾルデをそれぞれ初めて歌っている。フィンランドの作曲家のオペラにもたびたび出演している。演奏会や歌曲でも活躍、またフィンランドではポピュラー曲も好んで歌い、テレビなどでも親しまれて国民の人気を博している。シベリウスの《クレルヴォ》は20年以上各地で歌っている彼女の得意曲。弟のヴィッレ・ルサネンとの姉弟コンビでシカゴのグラントパーク音楽祭(2011年7月)やフィンランドのサヴォンリンナ音楽祭(2017年8月)で歌ってゐる。NHK交響楽団とは今回が初共演。

## ヴィッレ・ルサネン(バリトン)



フィンランドのバリトン。ヘルシンキのシベリウス・アカデミーで学んだ後、2004年、ラッペーンランタ国際声楽コンクールの男声部門で優勝。2005年9月、ロッシェニ《セビリアの理髪師》のフィガロでフィンランド国立歌劇場に初出演。以来同歌劇場には200回以上出演する主力歌手であり、モーツァルト《魔笛》のパパゲーノは39回も歌っている。2009年、英国スコティッシュ・オペラでのモーツァルト《コシ・ファン・トゥッテ》のグリエルモで国際的な活動を本格化させる。2010年6月、オランダ、アムステルダムでのラスカトフ《犬の心臓》の世界初演にボルメンタルで出演、同オペラで2013年3月にミラノのスカラ座に、2014年1月にリヨン歌劇場に出演。シベリウスの《クレルヴォ》は2013年2月にシドニー交響楽団(アシュケナージ指揮)と、2013年5月にRTE国立交響楽団と歌っており、さらに姉のソプラノ、ヨハンナ・ルサネンとの姉弟コンビでシカゴのグラントパーク音楽祭やフィンランドのサヴォンリンナ音楽祭で歌っている。NHK交響楽団とは今回が初共演。

## エストニア国立男声合唱団(男声合唱)

1944年、エストニアの作曲家グスタフ・エルネサクスによって創立。その後、オレヴ・オヤ、クノ・アレング、アンツ・ウレオヤ、アンツ・ソーツ、カスパルス・プトニンシュといった指揮者たちに鍛えられる。2011年からミック・ウレオヤが首席指揮者、芸術監督を務めている。教会音楽、クラシック作品、近現代の曲、エストニアの作曲家の曲、民謡や民俗音楽など、レパートリーはきわめて広い。また彼らの委嘱作も含め多数の初演を担ってきた。2006年にはエストニアのフォーク・メタルバンド、メツァ

トルとの共演も話題となった。エストニア国立男声合唱団は長年にわたり世界中を楽旅で回っており、旧ソ連や欧米の諸都市はもちろん、アジアにも頻りに訪れている。エストニア生まれの指揮者パーヴォ・ヤルヴィとは何度も共演している。1997年にパーヴォが指揮した《クレルヴォ》のレコーディングでは彼らが合唱を務め、また2002年に共演したシベリウスのカンタータ集のレコーディングは2003年のグラミー賞の最優秀合唱演奏に選ばれた。NHK交響楽団とは今回が初共演。

[吉田光司／音楽評論家]

## Program Notes | 神部智

フィンランドを代表する作曲家ジャン・シベリウス(1865~1957)の初期時代の大作《クレルヴォ》と情熱的な《フィンランディア》(男声合唱付き)は、いずれもフィンランド語の合唱を伴う壮大な作品である。また本日の公演では、シベリウス作品の中でも演奏される機会が少ない《レンミンケイネンの歌》と《サンデルス》も取り上げられる。4曲とも男声合唱が重要な役割を担うため、世界屈指のレベルを誇る合唱大国エストニアの名門、エストニア国立男声合唱団の洗練された歌声と深遠なハーモニーが大いに期待されよう。ソリストを務めるルサネン姉弟の歌唱も楽しみだ。

この革新的なプログラムに、地理的にも、言語的にもフィンランドに近いエストニア出身の指揮者で、明晰な洞察力とバイタリティを合わせ持つパーヴォ・ヤルヴィがどのように挑むのか、きわめて注目される。

## シベリウス

### 「レンミンケイネンの歌」作品31-1

男声合唱を伴う明朗な管弦楽曲であり、シベリウスの初期創作期を代表する《交響詩「4つの伝説」》(作品22)と同年に発表された。フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』に登場する奔放な英雄レンミンケイネンを題材としているが、テキストには『カレワラ』ではなく、若き詩人ユリヨ・ヴェイヨラの詩が用いられている。曲の中心素材に、《4つの伝説》の第4曲〈レンミンケイネンの帰郷〉と同じ楽想が活用されているのが特徴である。金管楽器の華々しいファンファーレで輝かしく始まり、男声合唱が勇ましい調べを朗々と歌う、シベリウスの熱烈なレンミンケイネン賛歌といえよう。

作曲年代	1896年
初演	1896年12月10日、ヘルシンキ、ヤルマリ・ハール指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団、ヘルシンキ大学男声合唱団
楽器編成	ピッコロ2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、弦楽、男声合唱

## 「サンデルス」作品28

1898年に手掛けられた男声合唱と管弦楽のための即興曲で、ムントラ・ムシカンテル男声合唱団が開催した作曲コンクールの応募作である。コンクールでは見事に優勝を飾ったものの、残念ながら作品が普及することはなく、1915年に修正の手が加えられた。テキストは、スウェーデンの名将ヨハン・サンデルスのフィンランド戦争(1808～1809)における活躍を描いたヨハン・ルートヴィグ・ルネベルグの名作、『旗手ストールの物語』から得ている。全体の構成と曲調はテキストの情景描写にしたがい、「快活なサンデルスの様子」で軽やかに幕を開けた後、「ロシア軍との戦い」を経て力強い「勝利」へと導かれる。

作曲年代	1898年、1915年改訂
初演	1900年3月16日、ヘルシンキ、ギョスタ・ソールシュトローム指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団、ムントラ・ムシカンテル男声合唱団
楽器編成	フルート2(ピッコロ2)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、弦楽、男声合唱

## 交響詩「フィンランディア」作品26(男声合唱付き)

1900年に初演された交響詩《フィンランディア》(作品26)は、フィンランドの作曲家シベリウスの代名詞ともいえる作品であり、今日まで世界中で広く愛好されてきた。

この作品は、1899年に委嘱を受けた舞台劇『歴史的情景』の最後を飾る「フィンランドは目覚める」の付随音楽を原曲としている。翌1900年、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団のパリ万博遠征公演のプログラムで演奏するため、シベリウスは上記の付随音楽を劇から切り離し、単独の交響詩《フィンランディア》へと改編。ただし同年7月2日にヘルシンキで初演された際は、支配国ロシアの厳しい検閲を配慮して「スオミ」(フィンランド語で「フィンランド」の意味)のタイトルが用いられている。およそ1か月間におよんだパリ万博遠征公演中、より一般的な「祖国」というタイトルで披露された《フィンランディア》はヨーロッパ各地で取り上げられ、シベリウスの国際的評価の確立に大きく貢献した。

19世紀フィンランドの苦難に満ちた時代を壮大な活人画で描いた「フィンランドは目覚める」は、「ロシア帝国の理不尽な圧政に対抗するフィンランド、その輝かしい未来」を主要なコンセプトとしている。《フィンランディア》もその内容を受け継いでおり、当時のフィンランドの異様な「閉塞感」と、皮肉にもその反動によって生じた激しい「高揚感」が、とても説得力ある形で表現されている。

作品は金管楽器の咆哮<sup>ほうこう</sup>で重々しく始まる。悲劇的な雰囲気<sup>なげだけ</sup>が満ちあふれていくのか、やがて<sup>たけだけ</sup>猛々しい闘争のファンファーレも聞こえてくる。すると一転して明るい曲調になり、勇壮な調べと敬虔な賛歌の対比を軸にしなが、クライマックスのコーダへ向けて力強く駆け上がっていく。なお、曲の中間部に現れる有名な賛歌の旋律は後に無伴奏合唱曲《フィンランディア賛歌》(歌詞はコスケンニエミとソラのものがある。前者の方が有名で、本日はコスケンニエミのものが使われる)へと改編され、人びとに大変親しまれるようになる。指揮者レオポルド・ストコフスキーはその美しい旋律を「全世界の国歌」と呼んだ。まさにストコフスキーのいうように、この清冽<sup>せいれつ</sup>な旋律にはシベリウスという作曲家の美質がすべて織り込まれており、人びとの心を捉えてやまない不思議な魅力にあふれている。

本日の演奏は、オリジナルの交響詩版に《フィンランディア賛歌》の合唱を組み合わせた形で行われる。この興味深い演奏形態は、かつてユージン・オーマンディ率いるフィラデルフィア管弦楽団が1950年代に録音。力強い管弦楽に巨大な合唱が加わることで、より荘厳かつ記念碑的な姿へと曲全体が変化している点が、大いに注目されよう。

作曲年代	1899～1900年
初演	1900年7月2日、ヘルシンキ、ロベルト・カヤヌス指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽、男声合唱

## シベリウス

### 「クレルヴォ」作品7

フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』の「クレルヴォ神話」(第31～36章)を題材とした《クレルヴォ》(作品7)は、初期シベリウスを代表する大規模な管弦楽曲である。全5楽章、演奏に1時間を超える大作であり、管弦楽と男声合唱のほか、クレルヴォ役のバリトンと妹役のソプラノを要する。

巨大な交響曲の創作を目指していた若きシベリウスが《クレルヴォ》の着想を得たのは、ウィーン留学時の1891年のことである。ウィーン滞在中、シベリウスは婚約者のアイノ・ヤルネフェルトと頻繁に手紙のやり取りを行っているが、熱烈な「フェノマン」(フィンランド語および文化の地位向上を目指した人々)だった彼女の存在が、《クレルヴォ》の構想に大きな影響を与えたことは間違いない。その創作に着手した頃、シベリウスは『カレワラ』の世界に完全に魂を奪われてしまったような状況で、ウィーン近郊の森を散策しながら作品のイメージを少しずつふくらませていった。

フィンランドに帰国後、シベリウスはアイノとの関係を深めながら、《クレルヴォ》の創作に本腰を入れる。困難をきたした作曲にはおよそ1年の歳月を要したが、その間、イングリア(フィンランド湾とラドガ湖の狭間のペテルブルクを中心とした地域)出身の有名な歌手、

ラリン・パラスケの吟唱に触れている点が注目されよう。民謡の真正な歌声を耳にしたシベリウスは大きな感銘を受け、その体験が《クレルヴォ》の創作にも計り知れない刺激を与えたと考えられている。

さまざまな試行錯誤を繰り返したため《クレルヴォ》の完成は予定より遅れてしまい、1892年4月28日に初演を迎えることになる。ただし、その日ヘルシンキ大学講堂に集まった満員の聴衆が手にしたプログラムには、「クレルヴォ、管弦楽、独唱、合唱のための交響詩」と記されていた。もともと交響曲として構想、創作されたものの、初演時に交響詩として発表された背景には、交響的ジャンルに対するシベリウスの複雑なジレンマ（あるいはコンプレックス）と、従来の図式に囚われない柔軟な発想の2つが認められよう。

いずれにせよ《クレルヴォ》の初演は歴史的な大成功を収め、シベリウスは一躍フィンランド音楽界のスターダムにのし上がるのだった。この作品はシベリウスの管弦楽曲のなかでもっとも長大であり、しかも重厚で記念碑的な趣さえたてている。とりわけ注目されるのは、この作品でシベリウスが初めて「自らの響き」を見出したことであろう。その響きは、もはや駆け出しの若者とは思えない素晴らしい奥行きを示している。わずか1年の期間で、《クレルヴォ》という作品にこれほどまでの充実がもたらされた理由は何だろうか。これまで取り組んできた地道な作曲訓練や留学の成果はその一因だろうし、パラスケの突き抜けた歌声、あるいはクレルヴォ神話の普遍的な悲劇性がシベリウスに強烈なインスピレーションを与えたと考えられる。だがもっとも重要な要因として指摘すべきは、婚約者アイノの存在であった。《クレルヴォ》創作時におけるシベリウスとアイノの関係はまさに特別であり、いわば両者の共同作業といってよいほど親密なものだったからである。

したがって作品はアイノに献呈されたとしてもまったく不思議ではないのだが、シベリウスはそうしなかった。それどころか、彼は《クレルヴォ》に対して驚くべき行動を起こす。コンサートで数回取り上げられた後、作曲者の存命中は作品の出版だけでなく、再演さえ原則的に禁じてしまうのである（その理由については、いまだに不明）。ちなみに《クレルヴォ》全曲の蘇演は、シベリウス没後の1958年6月12日、作曲者の女婿ユッシ・ヤラス（シベリウスの五女マルガレータの夫で指揮者）の指揮で行われている。それ以降、《クレルヴォ》は初期シベリウスの重要な管弦楽曲として再認識され始め、フィンランド国内のみならず世界中で広く取り上げられるようになった。

『カレワラ』のクレルヴォ神話は、超人的な力を持つ青年クレルヴォの成長と恋愛（妹との近親相姦）、自分を不遇に陥れた者たちへの復讐、悔恨の念による自決までを描いた壮大な悲劇である。

**導入** 大規模なソナタ形式で、曲全体の荘厳な雰囲気を出している。冒頭の長大な旋律が印象的だが、再現部における副次主題の力強い「成長」も構成上のポイントといえよう。シベリウスの優れた構成感覚を存分に堪能できる。



**クレルヴォの青春** 2つの対照的な領域が交互に現れる構成。作曲技法的には短小フレーズに微細な変化を加えつつ何度も繰り返す方法が取られているが、それは民謡の素朴な変奏手法を思わせる。

**クレルヴォとその妹** 作品全体の中軸を成す長大な楽章。男声合唱と2人のソリストを伴いながら、物語が緻密に展開していく。生き別れになった兄妹の「近親相姦」にスポットが当てられるが、従来はタブー視されてきた近親相姦という限界状況にあえて着目している点がシベリウスの《クレルヴォ》の最たる芸術的特徴といえよう。曲は大きく2つの部分に分けられ、前半はクレルヴォと妹の運命的な出会い、後半は男女の関係を持ってしまった兄妹の内的葛藤が描かれる。

**戦闘に赴くクレルヴォ** ロンド・ソナタ形式風の構成。クレルヴォの残忍な復讐劇が取り上げられるが、曲調は不気味なほど平明である。なお、2005年にブライトコプフより出版された批判校訂版《クレルヴォ》の本楽章の楽譜冒頭には、シベリウスが『カレワラ』第36章から抜粋した詩文(題辞)が、校訂者の方針により記されている。クレルヴォが笛を吹きながら喜び勇んで出陣する様子を描いたこの詩文は、同楽章のスケルツォの曲調と雰囲気や気分が一致しており、《クレルヴォ》の初演時、聴衆に配られたプログラムにも付されていた。

**クレルヴォの死** 再び〈導入〉の楽想が回想され、苦悩の末に自害を選択するクレルヴォの悲劇が男声合唱とともに荘厳に奏でられる。

作曲年代	1891～1892年
初演	1892年4月28日、ヘルシンキ、シベリウス指揮、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2(バス・クラリネット1)、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、弦楽、ソプラノ・ソロ、バリトン・ソロ、男声合唱

# シベリウス

## 「レンミンケイネンの歌」作品31-1

### 歌詞対訳

詞◎ユリヨ・ヴェイヨラ

訳◎神部 智

Lähtee nuori Lemminkäinen lemmen  
kultakummun luo,  
lemmen haltijattarelle  
uhriks' sydämensä tuo.  
Suonissansa uhriltulta polttaa  
lempi nuoruuden.  
Uhrilehto, lemmenlehto,  
ompi luonto keväinen.

Oi, on pyhitetty lemmenlehto!  
Oi, on elämäni nuoruus!  
Terve, Lemminkäinen!  
Kuule, elämäsi laulaa sulle.

Nyt valkorinnat koivut loistaa,  
taas nuortuu maa  
ja maire metsä kirkastuu,  
kevätluonto virkoaa  
ja kaunihimmin puhta taivas  
taas heijastaa.

Ja aamu koivukummun taakse  
luo ruskon maan,  
ja valkorintain puiden rungot

若きレンミンケイネンは旅立つ、  
黄金に輝く愛の丘へ向けて  
若者は愛の守護者に、  
いけにえの心を持っていく  
若者の血管の中で、  
愛がいけにえの炎を燃え立たせる  
いけにえの森、愛の森、  
それは春の息吹だ

おお、それは聖なる愛の森！  
おお、それは人生の若さ！  
万歳、レンミンケイネン！  
聞け、人生はお前に歌いかけている

今や<sup>しらかば</sup>白樺の木々が輝き  
大地は再び若返り、  
甘い森は明るくなる  
春の息吹はよみがえり  
澄み切った空は、  
もう一度照り返す

白樺の丘の背後で、  
朝焼けが大地を赤く染め  
白い木々の幹を

se peittää kullallaan  
ja puiden oksiin aamunkoitto  
luo aarteitaan.

Mut aamun nousten laulun  
kaihon taas linnut saa  
ja laulut kilvan kaikuilee  
ilon lyöden raikuaa.  
Nyt lemmen taikavoimaa koittaa vaan  
nuoruus saa.

Lähtee nuori Lemminkäinen lemmen  
kultakummun luo,  
lemmen haltijattarelle  
uhriks' sydämensä tuo.  
Suonissansa uhriltulta polttaa  
lempi nuoruuden.  
Uhrilehto, lemmelehto,  
ompi luonto keväinen.

Oi, on pyhitetty lemmelehto!  
Oi, on elämäni nuoruus!  
Terve, Lemminkäinen!

黄金色に覆う  
朝の光が木々の枝に  
宝物を広げる

だが昼が訪れると、  
鳥たちが再び歌いたくなる  
そして幸せの歌を  
競って鳴り響かせる  
今や愛の魔力を受けることができるのは、  
若さだけなのだ

若きレンミンケイネンは旅立つ、  
黄金に輝く愛の丘へ向けて  
若者は愛の守護者に、  
いけにえの心を持っていく  
若者の血管の中で、  
愛がいけにえの炎を燃え立たせる  
いけにえの森、愛の森、  
それは春の息吹だ

おお、それは聖なる愛の森！  
おお、それは人生の若さ！  
万歳、レンミンケイネン！

# シベリウス

## 「サンデルス」作品28

### 歌詞対訳

詞◎ヨハン・ルートヴィグ・ルネベルイ

訳◎神部 智

Sandels han satt i Pardalaby,  
Åt frukost i allsköns ro.  
“I dag, ett slaget, blir striden ny,  
Det skall gälla vid Virta bro.  
Herr pastor,  
jag låtit kalla er hit.  
Var god, foreller en bit!

Jag tänkt behålla er hos mig i dag,  
Det är så min önskan och plikt;  
Ni känner trakten här bättre än jag  
Och kan ge mig notiser av vikt.  
Var trygg,  
vi skola ej lukta blod.  
Ett glas? Maderan är god.  
Tutschkoff har sändt mig ett vänligt bud,  
Att vår vapenvila är slut.  
Låt maten smaka er! Sås, min Gud!  
Då vi ätit, rida vi ut.  
Vi måste nöjas med vad vi få,  
Kanske ni befaller margå?”

Det kom ett bud, ett ilbud kom:  
“Den är bruten, vår konvention;

サンデルスはパルダラの村で座り、  
静かに朝食を摂っていた。  
「今日、再び戦いが行われる。  
ヴィルタの橋で。  
牧師殿、だから私は  
そなたをここに呼んだのだよ。  
さあ、鱒を一切れいかがかな!

今日はそなたと共によう。  
それが私の望みであり、義務でもあるのだ。  
そなたはこの辺りを私よりご存知だから、  
重要な情報を与えてくれるだろう。  
ご安心ください、  
血が流れることはございません。  
飲むかね? マデイラがうまいぞ。  
トゥシュコフが友好的な手紙を寄こした。  
われらの休戦協定は終わったと。  
召し上がれ! いったいソースはどこだ!  
食事が終わったら、馬で出かけよう。  
今あるもので満足しなければなりません。  
そなたはワインが好みかね?」

そこに急いで使者がやってきた。  
「われらの協定は破棄されました。

Brusin har vändt med vår förpost om,  
Man hinner ej riva bron.  
Vårt ur var tolv,  
och vi följde det,  
Men den ryska klockan var ett.”

Sandels han satt och smorde sitt krås,  
Åt friskt, som om ingenting händt.  
“Försök herr pastor! En dåb på gås?  
Den äter man excellent.  
Det är Dolgoruki,  
som brådskar igen;  
Ett glas till hans ära, min vän!”

Men budet talte: “Herr General,  
Får jag bringa tillbaka ett svar?”  
“Jo, säg Fahlander,  
att bron är smal  
Och att batterier han har.  
Han må hålla ut där en timme, en halv.  
Herr pastor, kotlett av kalv?”

Ilbudet for, en sekund förlopp,  
Och en ryttare syntes igen:  
Som en blixtn han sprängde  
till trappan opp,  
I ett språng var han nere på den;  
Hans yttre röjde en ung löjtnant,  
Det var Sandels’ adjutant.

Han skyndade in i salen, han stod  
För sin chef med lågande blick.  
“Herr General,  
det har flutit strömmar av blod,  
Blod kostar vart ögonblick.

ブルーシンは先発隊と共に戻ってきました。  
もう橋を破壊する時間がありません。  
われらの時計は12時で、  
それに従っていますが、  
ロシアの時間は1時なのです」

サンデルスは座ったまま貪欲に、  
何事もなかったかのように食べ続けた。  
「牧師殿！この鴨のシチューはどうかね？  
素晴らしい味だよ。  
ドルゴルキーはいつものように  
我々を急かしてくる。  
彼の栄誉に乾杯しようじゃないか、友よ！」

だが使者は言った。「將軍、  
返事をいただいて、戻ってもよろしいですか？」  
「そうだな、ファーランドルに伝えてくれ。  
橋は狭く、  
我々には大砲もある。  
少しだけ持ちこたえてくれればよいと。  
牧師殿、仔牛のカツレツはいかがかね？」

使者は去った。次の瞬間、  
騎手が再び現れた。  
稲妻のように  
彼は階段を駆け上がり、  
一目散に彼らのもとへやってきた。  
その姿は若い将校だった。  
それはサンデルスの側近であった。

彼は部屋に駆け込み、立ちつくした。  
燃えるような瞳で司令官を見つめた。  
「將軍閣下、  
川が血であふれております。  
この瞬間にも血が流されています。

Vår här har mod,  
men den hade det mer  
På en halv mil närmare er.”

Sandels han såg på den komna förströdt:  
“Bevars, ni är varm  
som en ugn.  
Ni har säkert ridit er hungrig och trött,  
Kom, vila en stund, var lugn!  
Man måste tänka på hunger och tröst,  
Se här, genever till först?”  
Löjtnanten dröjde.

“Vår kamp blir hård,  
Man forcerar med framgång bron,  
Vår förtrupp sviktar  
i Kauppila gård,  
Där den trycks av en hel bataljon,  
Armen är bestört, allt går på sin hals;  
Vad order ges, vad befalls?”

“Jo, att ni sätter er vackert ned  
Och får er kuvert i skick;  
Och sen ni fått den, så ät i fred,  
Och sen ni ätit, så drick,  
Och sen ni druckit, så ät än mer,  
Där har ni order, jag ber.”

Harm brann i den unga krigarens själ,  
Av dess flammor hans öga sken.  
“General, jag är skyldig er sanning, nåväl,  
Ni föraktas av hela armen.  
Hos varenda soldat den tanke jag fann,  
Att ni är vår fegaste man.”

Sandels han fällde sin gaffel, han teg,

わが軍は士気がありますが、  
もっと必要です。  
もう少し閣下に近づければ」

サンデルスは彼をぞんざいに見つめた。  
「おやおや、君はオーヴンみたいに  
火照<sup>ほて</sup>っているな。  
長い騎乗で腹が減り、疲れているのだろう。  
しばらく休んで、落ち着きたまえ！  
まずは空腹と渴きを何とかしよう。  
最初にワインはどうだね？」  
中尉はたじろいだ。

「戦いは厳しいものとなりましょう。  
奴らは首尾よく橋を攻め、  
われらの先発隊は  
カウツピラ村で敗れました。  
われらは反撃を加えておりますが、  
部隊は取り乱し、すべてが苦境にあります。  
どのようなご命令を下して頂けますか？」

「さあ、まずは座りたまえ。  
そして食卓を整えるのだ。  
後は好きなように食べなさい。  
食べ終わったら、飲みなさい。  
飲み終わったら、また食べるのだ。  
これが私の命令だよ」

若い戦士の魂は怒りに燃えた。  
彼の瞳に炎がきらめいた。  
「將軍、私はあなたに真実をお話しします。  
あなたは、全軍から輕蔑<sup>けいべつ</sup>されるでしょう。  
そしてすべての兵士が思うでしょう。  
あなたはわれらの中で最も臆病者であると」

サンデルスはフォークを置き、黙っていたが、



Brast äntligen i gapskratt ut.  
“Hur var det, herre, är Sandels feg,  
Säger man så?  
Åh hut!  
Min häst, låt sadla min ädla Bijou!  
Herr pastor, ni följer ej nu.”

Det var storm, det var brak,  
det var strid på den strand,  
Där den Sandelska hären var ställd.  
I ett rökmoln svepte sig vatten och land,  
Och ur molnet blixtrade eld,  
Som av åskor dånade rymdens valv,  
Och den blodiga marken skalv.

Där stod vid sitt bröstvärn  
Finlands tropp,  
Såg trotsigt faran emot;  
Men från rote till rote en viskning lopp,  
Man hörde ett dämpat knot:  
“Han är borta,  
han gömmer sig undan igen,  
Generalen synes ej än.”

Men han syntes, han kom.  
Vid sitt främsta standar  
På redutten han stannade nu,  
Och hans öga var lugnt,  
och hans panna var klar,  
Och han sken på sin ädla Bijou,  
Han satt orörlig med tub i sin hand  
Och betraktade brygga och strand.

Och han sågs på sin springare långt ifrån,  
Och som tusendes gällde hans fall,

遂に大笑いした。  
「何、サンデルスが臆病者だと。  
彼らがそう言うのか？ よし、  
行こうじゃないか！  
私の馬、わが高貴な馬に鞍を！  
牧師殿、あなたは来なくてよいぞ」

嵐の中の、  
岸辺での戦いだった。  
サンデルス軍は敵と向き合っていた。  
水辺も陸地も煙が立ち込めていた。  
その煙の中から閃光せんこうがきらめいた。  
雷鳴が天空にとどろき、  
血に染まった大地は震えた。

フィンランド軍は  
守りに入っていた。  
危機に勇ましく立ち向かっていた。  
だが兵士の間では噂が広まっていた。  
ひそひそと不平が聞こえてきた。  
「彼は逃げた。  
彼は隠れたのだ。  
将軍の姿はまだ見えないぞ」

いや彼は現れた、  
司令の軍旗の下に。  
砦とりでのところに立っている。  
彼の目は落ち着いていて、  
その肩間みげんは澄んでいた。  
気高き駿馬の上で、彼は輝いていた。  
望遠鏡を手に、微動だにせず座っていた。  
橋と岸辺を見つめながら。

彼の姿は遠くからもはっきり見えた。  
彼の運命は千人の兵士たちとあった。

Och fördubblat hördes kanonernas dån  
Från fientliga strandens vall,  
Och det ljud kring  
hans hjässa av kulor ett vin,  
Men han ändrade icke en min.

Och den tappre Fahlander,  
han dröjde ej mer,  
Till sin chef på redutten han red:  
“General, man har märkt er,  
man måttar på er,  
Det gäller ert liv, rid ned!”  
“Ned, ned, general,  
er fara är vår,”  
Skrek stormande hela hans kår.

Sandels han rörde sig ej från sin ort,  
Till sin överste talte han stolt:  
“Är det fruktan, det skriker,  
ert folk så förgjort?  
Om det sviktat i dag, är det sålt.  
Men välan ett försök!  
Var beredd till affär,  
På minuten är fienden här.”

Den ringa hop, som vid Kauppila stod,  
Av tusende fiender tryckt,  
Den hade kämpat med hjältemod,  
Men den nalkades nu i flykt.  
Den hann generalens batteri,  
Den störtade honom förbi.

Han rörde sig ej, stolt dröjde han kvar,  
Som han sutit, satt han ännu,  
Och hans öga var lugnt,

大砲の轟音<sup>ごうおん</sup>が聞こえた。  
敵側の岸辺から。  
弾丸がうなりを上げながら  
彼の頭をかすめた。  
だが彼はまったく動かなかった。

勇敢なファーランドルは、  
もうためらわなかった。  
彼は司令官の砦まで馬を駆った。  
「將軍、奴らが見てます。  
閣下を狙ってます。  
危険ですから、お下がりにください！」  
「お下がり下さい、閣下。  
あなたの危険はわれらのもの」  
全兵士が激しく叫んだ。

サンデルスは動かなかった。  
彼は誇らしげに大佐に言った。  
「皆は、怖いから  
叫ぶのだろう。  
今動揺しても、もう手遅れだ。  
挑戦せよ！  
行動を起こすのだ。  
すぐに敵はやって来るぞ」

カウツピラ村にいた小部隊は、  
千人の敵に攻められたが、  
勇ましく戦っていた。  
だが撤退の時が近づいていた。  
敵は將軍の砦まで近づき、  
突撃しようとした。

彼は動かず、誇らしげに留まっていた。  
変わらずに座ったままだった。  
彼の目は落ち着いていて、

och hans panna var klar,  
Och han sken på sin ädla Bijou,  
Och han mätte den här,  
som i segrande lopp  
Mot hans eldar rusade opp.

Och han söktes av dödar  
från tusen gevär,  
Men han tycktes ej veta därav;  
Han såg den komma, den kom helt när,  
Men på faren ej akt han gav.  
Han bidde sin tid.  
han såg på sitt ur,  
Han satt som i djupaste frid.

Men den kom, den minut,  
som han väntat,  
Och nu till sin överste sprängde han ned:  
“Är det färdigt, ert folk,  
är det likt sig ännu,  
Skall det veta att bryta ett led?  
Jag har låtit de stormande yvas; välan  
Vräk undan dem nu som en man!”  
Det var sagt, det var nog,  
det behövdes ej mer,

Det blev fröjd, det blev jublande rop.  
Sexhundra krigare stormade ner  
Mot den trotsande fiendes hop,  
Och den vräktes tillbaka,  
pluton för pluton,  
Tills den föll nedtrampad vid bron.

Sandels han kom till sin här i galopp,  
Där vid stranden den segrande stod.

その眉間は澄んでいた。  
気高き駿馬の上で、彼は輝いていた。  
彼は勝利者のように、  
軍勢を掌握していた。  
向かってくる敵の姿を。

彼は敵が来るのを見ていた。  
奴らはとても近づいていた。  
だが彼は危険を顧みなかった。  
千の鉄砲に狙われて死が迫っていたが、  
気に留めていないようだった。  
彼は時計に目をやり、  
時期を見計らっていた。  
深い平穩に包まれ、ただ座っていた。

しかし遂に  
待ちわびた時が来た。  
彼は大佐のもとへ駆け寄った。  
「準備はいいか。  
戦列を破壊する手立ては  
分かっているだろうか？  
私は奴らを十分に引き付けた。  
今こそ奴らを片付けろ、男らしく！」  
そう言った。それ以上は  
何も語る必要がない。

歡喜の雄叫びが上がった。  
六百の兵士たちが襲い掛かった。  
手ごわい敵勢に向かつて。  
奴らを小隊ごと、  
追い返していった。  
奴らは橋のところで倒れ、踏みつけられた。

サンデルスは全速力で自軍に駆け寄った。  
勝利して岸边に立つ軍勢のところへと。

Då hans vita Bijou bland lederna lopp,  
I sin snöglans purprad med blod,  
Och generalen med tjusningens  
eld i sin själ  
Glatt hälsade trupp och befäl;

Då spordes ej mer ett smygande knot,  
En viskning, bister och dov,  
Nej, ett jubel stormade honom emot,  
Och i jublet hördes hans lov,  
Och det roptes av röster till tusende tal:  
“Hurra för vår tappra genral!”

彼の白い駿馬が隊間を駆け抜けた時、  
その雪のような毛並みは  
血で真っ赤に染まっていた。  
将軍の魂は喜びに燃え、  
嬉しそうに兵士や将校たちをねぎらった。

もはやこそそした不平は聞こえてこない。  
苦く低いつぶやきは。  
それどころか、歓呼の嵐が彼に押し寄せる。  
賞賛と歓喜の賛美が歌われた。  
何千もの声が叫んでいた。  
「万歳、われらの勇敢な将軍！」と。

## シベリウス

### 交響詩「フィンランディア」作品26(男声合唱付き)

#### 歌詞対訳

詞◎ヴェイッコ・アンテロ・コスケンニエミ

訳◎神部 智

Oi Suomi, katso, sinun päiväs koittaa,  
yön uhka karkoitettu on jo pois,  
ja aamun kiuru kirkkaudessa soittaa  
kuin itse taivahan kansi sois.  
Yön vallat aamun valkeus jo voittaa.  
Sun päiväs koittaa, oi synnyinmaa!

Oi nouse, Suomi, nosta korkealle  
pääs seppelöimä suurten muistojen,  
oi nouse, Suomi, näytit maailmalle  
sa että karkoitit orjuuden  
ja ettet taipunut sa sorron alle,  
on aamus alkanut, synnyinmaa!

おお、フィンランド、見よ、汝<sup>なんじ</sup>の夜が明ける  
闇夜の脅威は遠く過ぎ去った  
澄み切った朝空に、ひばりが歌う  
それはまるで天上の歌  
輝かしい夜明けが、夜の脅威を退けた  
日が昇る、おお、わが祖国よ!

おお、フィンランド、高く掲げよ  
偉大なる記憶に満ちたその頭を  
おお、フィンランド、世に示すのだ  
隷属の束縛を断ち切り  
いかなる抑圧にも屈しなかった汝の姿を  
夜は明けたのだ、わが祖国よ!

# シベリウス

## 「クレルヴォ」作品7

### 歌詞対訳

詞◎『カレワラ』第35章 第69～286行(クレルヴォとその妹)、第36章 第297～346行(クレルヴォの死)

訳◎神部 智

### III Kullervo ja hänen sisarensa

#### Kuoro

Kullervo, Kalervon poika,  
sinisukka äijön lapsi,  
hivus keltainen, korea,  
kengän kauto kaunokainen,  
läksi viemähän vetoja,  
maajyviä maksamahan.

Vietyä vetoperänsä,  
maajyväset maksettua  
rekehensä reutoaikse,  
kohennaikse korjahansa.  
Alkoi kulkea kotihin,  
matkata omille maille.

Ajoa järyttelevi,  
matkoansa mittelevi  
noilla Väinön kankahilla,  
ammoin raatuilla ahoilla.

Neiti vastahan tulevi,

### III クレルヴォとその妹

#### 合唱

クレルヴォ、カレルヴォの息子  
いと青き靴下の老人の子は  
美しい黄色の髪をして  
見事な革の靴を履き  
税を納めに出かけた  
穀物税を納めに

税を収めた後  
穀物税を収めた後で  
櫛そりに荒々しく飛び乗った  
櫛の上に立って  
家へと向かい始めた  
自分の土地へと旅立った

櫛を荒々しく走らせた  
旅を続けた  
ヴァイノの荒野を越えて  
その昔、耕した野を越えて

ある時、一人の娘に出会った



hivus kulta hiihtelevi  
noilla Väinön kankahilla,  
ammoin raatuilla ahoilla.

Kullervo, Kalervon poika,  
jo tuossa piättelevi;  
alkoi neittä haastatella,  
haastatella, houkutella:

### **Kullervo**

Nouse, neito korjahani,  
taaksi maata taljoillesi!

### **Neito I**

Surma sulle korjahasi,  
tauti taaksi taljoillesi!

### **Kuoro**

Kullervo, Kalervon poika,  
sinisukka äijön lapsi,  
iski virkkua vitsalla,  
helähytti helmivyöllä.  
Virkku juoksi, matka joutui,  
tie vieri, reki rasasi.

Neiti vastahan tulevi,  
kautokenkä kaaloavi  
selvällä meren selällä,  
ulapalla aukealla.

Kullervo, Kalervon poika,  
hevoista piättelevi,  
suutansa sovittelevi,  
sanojansa säätelevi:

金色の髪をなびかせた娘に  
ヴァイノの荒野を越えて  
その昔、耕した野を越えて

クレルヴォ、カレルヴォの息子は  
そこで櫓を止め  
娘に向かって話しかけた  
話しかけて誘った

### **クレルヴォ**

お乗りなさい、娘さん、この櫓に  
中の毛皮の上で休みなさい!

### **第一の娘**

死があなたの櫓の中へ  
病がその毛皮の上に!

### **合唱**

クレルヴォ、カレルヴォの息子  
いと青き靴下の老人の子は  
駿馬を鞭打った  
玉飾りの鞭をふるった  
馬は駆け抜け、旅ははかどり  
櫓は揺れ、さらに道は進んだ

ある時、一人の娘に出会った  
革の靴で歩いている娘に  
海の向こうへと  
開けた水の上を

クレルヴォ、カレルヴォの息子  
そこで馬を止めて  
口を開くと  
次のように語りかけた

## Kullervo

Tule korjahan, korea,  
maan valio, matkoihini!

## Neito II

Tuoni sulle korjahasi,  
Manalainen matkoihini!

## Kuoro

Kullervo, Kalervon poika,  
sinisukka äijön lapsi,  
iski virkkua vitsalla,  
helähytti helmivyöllä.  
Virkku juoksi, matka joutui,  
reki vieri, tie lyheni.

Neiti vastahan tulevi,  
tinarinta riioavi  
noilla Pohjan kankahilla,  
Lapin laajoilla rajoilla.

Kullervo, Kalervon poika,  
hevoistansa hillitsevi,  
suutansa sovittelevi,  
sanojansa säätelevi:

## Kullervo

Käy, neito rekoseheni,  
armas, alle vilttieni,  
syömähän omeniani,  
puremahan päähkeniä!

## Sisar

Sylen, keho, kelkkahasi,  
retkale, rekosehesi!

## クレルヴォ

この橇にお乗りなさい、美しい娘さん  
国一番の美人よ、一緒に旅をしよう!

## 第二の娘

トウオニ(死)があなたの橇の中へ  
死があなたと一緒に旅をせよ!

## 合唱

クレルヴォ、カレルヴォの息子  
いと青き靴下の老人の子は  
駿馬を鞭打った  
玉飾りの鞭をふるった  
馬は駆け抜け、旅ははかどり  
橇は揺れ、さらに道は進んだ

ある時、一人の娘に出会った  
鍔すずのブローチを付けた娘は急いでいた  
ポヒョラの荒野の上を  
ラップの広大な辺境を

クレルヴォ、カレルヴォの息子は  
そこで馬を止めて  
口を開くと  
次のように語りかけた

## クレルヴォ

お乗りなさい、娘さん、この橇へ  
可愛い娘よ、この毛皮の下へ  
私のリンゴを食べに  
木の実を味わいに!

## 妹

悪人め、唾つばしてやるわ、あなたの橇に  
荒くれ者め、その橇に!

Vilu on olla viltin alla,  
kolkko korjassa eleä.

### Kuoro

Kullervo, Kalervon poika,  
sinisukka äijön lapsi,  
koppoi neion korjahansa,  
reualti rekoschensa,  
asetteli taljoillensa,  
alle viltin vierieteli.

### Sisar

Päästä pois minua tästä,  
laske lasta vallallensa  
kunnotointa kuulemasta,  
pahalaista pylvomasta,  
tahi potkin pohjan puhki,  
levittelen liistehesi,  
korjasi pilastehiksi,  
rämäksi re'en retukan!

### Kuoro

Kullervo, Kalervon poika,  
sinisukka äijön lapsi,  
aukaisi rahaisen arkun,  
kimahutti kirjakannen;  
näytteli hope'itansa,  
verkaliuskoja levitti,  
kultasuita sukkasia,  
vöitänsä hopeapäitä.

Verat veivät neien mielen,  
raha muutti morsiamen,  
hopea hukuttelevi,  
kulta kuihauttelevi.

冷たいでしょう、その毛皮の下は  
暗闇でしょう、その橇の中は

### 合唱

クレルヴォ、カレルヴォの息子  
いと青き靴下の老人の子は  
娘を引きずり込んだ、橇の中へ  
橇の中へと、娘を引っぱり込んだ  
毛皮の上へ押し倒し  
覆いの下へと押し込んだ

### 妹

私をここから出して  
自由にさせて  
聞きたくないわ  
汚れた邪悪な言葉は  
そうでないと橇の底を蹴って  
橇の裂け目を広げて  
この橇を破片にしてやるわ  
橇を微塵<sup>みじん</sup>にしてやるわ!

### 合唱

クレルヴォ、カレルヴォの息子  
いと青き靴下の老人の子は  
積んでいた宝の箱を開けた  
音を立てながら装飾のある蓋を  
そして娘に見せたのだ、中の銀を  
広げて見せた、選び抜かれた布地を  
金の縁取りのある靴下を  
銀の飾りのある帯を

布地は娘の心を揺るがせ  
お金は花嫁の気持ちを変えた  
銀が彼女を破滅させ  
金が彼女を惑わせた

## Sisar

Mist'olet sinä sukuisin,  
kusta, rohkea, rotuisin?  
Lienet suurtaki sukua,  
isoa isän aloa.

## Kullervo

En ole sukua suurta,  
enkä suurta enkä pientä,  
olen kerran keskimmäistä:  
Kalervon katala poika,  
tuhma poika tuiretuinen,  
lapsi kehjo keiretyinen.  
Vaan sano oma sukusi,  
oma rohkea rotusi,  
jos olet sukua suurta,  
isoa isän aloa!

## Sisar

En ole sukua suurta,  
enkä suurta enkä pientä,  
olen kerran keskimmäistä:  
Kalervon katala tyttö,  
tyhjä tyttö tuiretuinen,  
lapsi kehjo keiretyinen.

Ennen lasna ollessani  
emon ehtoisen eloilla,  
läksin marjahan metsälle,  
alle vaaran vaapukkahan.  
Poimin maalta mansikoita,  
alta vaaran vaapukoita;  
poimin päivän, yön lepäsin.  
Poimin päivän, poimin toisen;  
päivälläpä kolmannella

## 妹

お話し下さい、あなたの家系のことを  
勇敢な人よ、どんな家柄なのですか?  
繋つながっているのでしょうか  
立派な祖先と

## クレルヴォ

私の家柄は大したことない  
偉大でも、卑小でもない  
ちょうど中流の家柄だ  
カレルヴォのつまらない息子だ  
愚かで無能な子で  
何の取り柄もない息子さ  
話しておくれ、君の家柄のことを  
君の勇敢な素性を  
繋つながっているのではないか  
立派な祖先と!

## 妹

私の家柄は大したことありません  
偉大でも、卑小でもありません  
ちょうど中流の家柄です  
カレルヴォのつまらない娘です  
愚かで無能な子で  
何の取り柄もない娘です

私がまだ幼かった頃  
やさしい母と一緒に暮らしていました  
森へ木いちごを摘みに行き  
山の麓ふもとで木いちごを探し  
野原で木いちごを集めました  
山の麓で木いちごを摘んで  
昼間に摘み、夜に休みました  
昼間に摘み、次の日も同じで  
三日目も同じようにすると

en tiennyt kotihin tietä:  
tiehyt metsähän veteli,  
ura saateli salolle.

Siinä istuin, jotta itkin.  
Itkin päivän, jotta toisen;  
päivänäpä kolmantena  
nousin suurelle mäelle,  
korkealle kukkulalle.  
Tuossa huusin, hoilaelin.  
Salot vastahan saneli,  
kankahat kajahtelivat:  
‘Elä huua, hullu tyttö,  
elä mieletöin, melua!  
Ei se kuulu kumminkana,  
ei kuulu kotihin huuto!’

Päivän päästä kolmen, neljän,  
viien, kuuen viimeistäki  
kohenihiin kuolemahan,  
heitihin katoamahan.  
Enkä kuollut kuitenkana,  
en mä kalkinen kaonnut!

Oisin kuollut, kurja raukka,  
oisin katkennut, katala,  
äskän tuosta toisna vuonna,  
kohta kolmanna kesänä  
oisin heinäna helynnyt,  
kukoistellut kukkapäänä,  
maassa marjana hyvänä,  
punaisena puolukkana,  
nämät kummat kuulematta,  
haikeat havaitsematta.

私は家路が分からなくなりました  
道は森の中へ私を導き  
小道は私を森へと連れ込んだのです

そこに座り、私は泣きました  
一日泣き、そして二日目  
三日目までずっと泣いてから  
私は大きな山に登りました  
高い山の頂上に  
そこで私は呼んで叫んだのです  
森は応えて言いました  
荒野も同じようにとどろいたので  
「呼ぶでない、狂気の娘よ  
叫ぶでない、愚かな娘よ!  
それを聞く者は誰もおらぬ  
故郷にその叫びは届くまい」

そして三日、四日経ち  
ついには五日、六日となって  
私は死ぬ覚悟をし  
身投げをしたのです  
けれど死ぬことはできませんでした  
身を滅ぼすことができなかったのです!

もし死ぬことができていたら、哀れな娘が  
身を滅ぼすことができていたら、不幸な者が  
その二年後の  
三度目の夏の日には  
草となって輝いて  
美しい花となったでしょうに  
地面で上等な木いちごに  
真っ赤なこけももになれたでしょうに  
だったら、こんな恐ろしいことは聞かず  
こんなおぞましいことを知ることもなかった  
のに

## Kullervo

Voi, poloinen, päiviäni,  
voipa, kurja, kummiani,  
voi kun pi'in sisarueni,  
turmelin emoni tuoman!  
Voi isoni, voi emoni,  
voi on valtavanhempani!  
Minnekä minua loitte,  
kunne kannoitte katalan?  
Parempi olisi ollut  
syntymättä, kasvamatta,  
ilmahan sikeämättä,  
maalle tälle täytymättä.  
Eikä surma suorin tehnyt,  
tauti oike'in osannut,  
kun ei tappanut minua,  
kaottanut kaksiöisnä.

---

## V Kullervon kuolema

### Kuoro

Kullervo, Kalervon poika,  
otti koiransa keralle,  
läksi tietä telkkimähän,  
korpehen kohoamahan,  
Kävi matkoa vähäisen,  
astui tietä pikkaraisen;  
tuli tuolle saarekselle,  
tuolle paikalle tapahtui,  
kuss'oli piian pillannunna,  
turmellut emonsa tuoman.

Siin'itki ihana nurmi,

## クレルヴォ

ああ惨めなわが身、わが日々よ  
ああ哀れな、恐ろしいことよ  
ああわが実の妹を  
母の子を犯してしまったとは！  
ああ父よ、ああ母よ  
ああ、わが両親よ！  
どうして私を産んだのか  
不幸な者をどこへ導こうとするのか？  
ずっと良かっただろう  
生まれ、育つことがなかったら  
この世に生まれることがなかったら  
この世に出て行くことがなかったら  
死は私を正しく扱わなかった  
病も私を正しく遇しなかった  
私を滅ぼさなかったのだから  
生まれて二日経った時に

---

## V クレルヴォの死

### 合唱

クレルヴォ、カレルヴォの息子は  
犬を引き連れ  
道を辿って行った  
荒野へと登って行った  
わずかにさまよい  
少しだけ進むと  
森の片隅にたどり着いた  
その場所はかつて  
彼が乙女を誘惑し  
母の子を破滅させてしまったところ

そこでは穏やかな草々が泣き

aho armahin valitti,  
nuoret heinät helliteli,  
kuikutti kukat kanervan  
tuota piian pillamusta,  
emon tuoman turmelusta:  
eikä nousnut nuori heinä,  
kasvanut kanervan kukka,  
ylennyt sijalla sillä,  
tuolla paikalla pahalla,  
kuss' oli piian pillannunna,  
emon tuoman turmellunna.

Kullervo, Kalervon poika,  
tempasi terävän miekan;  
katselevi, kääntelevi,  
kyselevi, tietelevi.  
Kysyi mieltä miekaltansa,  
tokko tuon tekisi mieli  
syöä syylistä lihoa,  
viallista verta juoa.

Miekka mietti miehen mielen,  
arvasi uron pakinan.  
Vastasi sanalla tuolla:  
“Miks' en söisi mielelläni,  
söisi syylistä lihoa,  
viallista verta joisi?  
Syön lihoa syyttömänki,  
juon verta viattomänki.”

Kullervo, Kalervon poika,  
sinisukka äijön lapsi,  
pään on peltohon sysäsi,  
perän painoi kankahasen,  
kären käänti rintahansa,

美しい野が嘆いていた  
若草は悲しみにくれ  
荒野の花々は悲嘆していた  
あの乙女の破滅を  
母の子の死を  
そこでは若草が育たず  
荒野の花々は咲かなかった  
ここには何も生えぬ  
忘まわしきこの場所には  
彼が乙女を誘惑し  
母の子を破滅させてしまったところには

クレルヴォ、カレルヴォの息子は  
鋭い剣を引き抜くと  
裏表にして眺め  
尋ねて聞いた  
その剣がどう思うかを  
自分を滅ぼす気があるかと  
罪深い<sup>むさぼ</sup>肉体を貪る気が  
邪悪な血<sup>すず</sup>を啜る気があるかと

剣は彼の気持ちを理解した  
勇士の問いかけを理解した  
そして答えた  
「喜びでないはずがあろうか  
罪深い肉を貪り  
邪悪な血を啜ることが?  
私は罪のない肉を貪り  
汚れていない血を啜ってきたのだから」

クレルヴォ、カレルヴォの息子  
いと青き靴下の老人の子は  
剣の柄を地面に押し当て  
荒地に柄をしっかりと押し込むと  
刃先を自分の胸に向け



itse iskihe kärelle.  
Siihen surmansa sukesi,  
kuolemansa kohtaeli.

Se oli surma nuoren miehen,  
kuolo Kullervo urohon,  
loppu ainakin urosta,  
kuolema kovaosaista.

その身を剣に刺し込んだ  
かくして彼は自死を遂げた  
望み通りの死を

このように若者は自決した  
勇士クレルヴォは死んだ  
これが英雄の最後  
悲運な者の死に方であった

## 第十九回

# 「常設」ではないオーケストラ

——二期一会の灼熱にかける

シリーズ

# オーケストラの ゆくえ

現代のオーケストラをめぐる  
さまざまなおトピックを深掘りしていくシリーズ。

第十九回は、音楽ジャーナリストである池田卓夫さんに  
非常設のオーケストラについて  
語っていただきます。

池田卓夫

Takuo Ikeda

オーケストラの未来を考える連載において、想定外?の「非常設」の登場だ。特別の演奏会や音楽祭の度ごと、国内外のソリストやオーケストラ楽員を集める「非常設楽団」である。NHK交響楽団などの常設楽団が固定の楽員、事務局員らを擁し、本拠地での定期公演を基盤としているのに対し、非常設楽団は特定プロジェクトのため1回ごとに編成され、目的を達成した時点で解散する。たとえ名称を継続して使うとしても、メンバーの顔ぶれはどんどん変わっていく。常設楽団が「線」や「面」なら、非常設楽団は「点」の位置付けであり、音楽の世界で担う役割にも明確な棲み分けがなされている。

## サイトウ・キネン・オーケストラの活動

日本国内の非常設楽団で最も名高いのは、指揮者の小澤征爾を総監督いただくサイトウ・キネン・オーケストラだろう。小澤をはじめ山本直純、秋山和慶、尾高忠明、井上道義、飯守泰次郎ら数多くの指揮者、さらにヴァイオリンの前橋汀子、潮田益子、ヴィオラの今井信子、チェロの堤剛、ピアノの内田光子、田崎悦子、中村紘子らを育てた名教師、齋藤秀雄(1902~1974)の没後10年に当たった1984年に小澤、秋山の指揮で弟子たちが集まり、東京と大阪で演奏会を開いた桐朋学園齋藤秀雄メモリアル・オーケストラが起源。

最初は恩師の追悼が目的だったので出演料なし。1回限りのはずが反響の大きさに定期的な活動が検討され、1987年のヨーロッパ公演を機に現在の名称となった。

齋藤は1927年にN響の前身である新交響楽団の首席チェロ奏者に就き、翌年には指揮者としてもデビュー。2度のベルリン留学を経て1936年以降、N響の指揮者として滞日したジョセフ・ローゼンストック(1895～1985)の薫陶を受けた。第2次世界大戦後の「子供のための音楽教室」、桐朋学園を拠点にした教育者の顔を持つ以前に、日本のオーケストラ発展史の黎明期れいめいを担う音楽家だった。サイトウ・キネン・オーケストラは1990年にザルツブルク音楽祭へ出演。1992年にはサイトウ・キネン財団も設立され、同年9月に長野県松本市で始まったサイトウ・キネン・フェスティバル松本(現セイジ・オザワ松本フェス

ティバル)の中核を担う演奏団体となった。

筆者は旧西ドイツで働いていた時期の1989年に初めて、小澤と秋山が指揮するサイトウ・キネン・オーケストラをフランクフルトのコンサートホール「アルテ・オーパー」で聴いた。まだ発足当初のメンバーが大半で、「齋藤メソッド」の優秀な合奏技術を基盤に日本人マエストロ2人が緻密ちみつな音楽を造形していた半面、独特の一致団結感が個々の名人芸の百花繚乱ひやつかりようらんを抑え、意外なほどモノトーンな音色に驚いた記憶がある。帰国後、松本のフェスティバルを定期的に訪ねる過程でメンバーの顔ぶれも齋藤の直弟子から孫弟子、小澤が世界各地で指揮したオーケストラの名手たちの混成チームへと変わってきた。全員一斉にマエストロの指示に従う上意下達の構造も次第に崩れ、室内乐的な「横方向」のコミュニケーションが発展するなか、毎年のメ



小澤征爾指揮、サイトウ・キネン・オーケストラ

ンバー交代にもかかわらず、このオーケストラ固有の音色(サウンド・アイデンティティ)が醸成されるに至ったのは、実に興味深い文化現象である。モノトナスという第一印象は完全に消えた。

小澤は齋藤とともに戦後の音楽教育に携わった音楽評論家、吉田秀和(1913~2012)の後を受けて2013年、茨城県の水戸芸術館の2代目館長に就いたが、1990年の開館時から専属の水戸室内管弦楽団の音楽顧問を務め、レコーディングも行ってきた。同室内管とサイトウ・キネンはメンバーも重なり、小澤には編成の大小からくる表現の違いを楽しんでいるようなところがあった。ただ70歳(2005年)以降の小澤は闘病とともに生き、サイトウ・キネン、水戸室内管の両方で、かつてほどのリーダーシップを發揮できないでいる。成熟期を迎えた2つの団体の今後は、日本の非常設楽団全体も左右しそうだ。

## 国内外にあるさまざまな形のオーケストラ

一方、作曲家の三枝成彰、指揮者の大友直人を中心に全国の常設楽団の首席奏者たちが集まるジャパン・ヴィルトゥオーゾ・シンフォニー・オーケストラは1991年9月発足。多彩な客演指揮者、ソリストを迎えながら、累計演奏回数は90回に達した。三枝は毎年の大晦日おおみそかにベートーヴェンの交響曲全9曲を一気に演奏するマラソン企画「ベートーヴェンは凄い！」も2003年に立ち上げた。ここでの非常設楽団は現在、岩城宏之メモリアル・オーケストラを名乗っている。長くN響正指揮者の任にあった岩城(1932~2006)は2004年、

2005年と「凄い！」を振り続け、力尽きた。N響第1コンサートマスター、篠崎史紀をまとも役とするメモリアル・オーケストラの実態はN響をはじめとする全国の常設楽団の有志の混成チームであり、現在は2007年から2009年、2011年以降の毎年の指揮を担ってきた小林研一郎との共同作業の下、徹底して「濃い」演奏を繰り返している。

さらに北海道の国際教育音楽祭パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)では芸術監督ワレリー・ゲルギエフの下に世界のエリート音楽学生、宮崎国際音楽祭では徳永二男(ヴァイオリン)、鹿児島県の霧島国際音楽祭では堤剛(チェロ)とそれぞれの音楽監督とゆかりの深い奏者が集い、臨時編成のオーケストラが華やかさを競う。

海外ではこうしたフェスティバル・オーケストラが非常設楽団の主流である。史上最強と思えるのは作曲家リヒャルト・ワーグナー(1813~1883)が自らの楽劇の理想的上演を目指し、1876年に完成したパイロイト祝祭劇場のオーケストラだろう。毎年夏のパイロイト音楽祭期間中、ドイツに限らないヨーロッパ各地の歌劇場管弦楽団、交響楽団からワーグナー好きの楽員が馳せ参じ、祝祭劇場の破格に深く、独自の音響を備えたピットで長大な楽劇の演奏に興じる。非常設であっても顔ぶれは半固定、奏法や様式感の統一が徹底しているため、世界のワーグナー上演の基準をなす手強い名人集団である。

パイロイトと同じく音楽祭のレジデンス(座付)オーケストラとして発足しながら、後年、小澤とサイトウ・キネンのようなマエストロとスター奏者の共同作業の場に変容したのはスイスのルツェルン祝祭管弦楽団。1938年に



リカルド・シャイー指揮、ルツェルン祝祭管弦楽団

ルツェルン音楽祭が自前のオーケストラをしつらえ、アルトゥーロ・トスカニーニと最初の演奏会を行って以来、1990年代初頭まで必要に応じて多くの指揮者と共演したが、活動は次第に停滞。代わって1999年、クラウディオ・アバド(1933~2014)がヨーロッパの若手奏者を集めて1986年に立ち上げたグスタフ・マーラー・ユージェント管弦楽団がレジデンスに招かれた。アバドと音楽祭の総監督、ミハエル・ヘフリガーはマーラー・ユージェントを中核にルツェルン祝祭管の再興に着手、2003年に新体制を整えた。ヴァイオリンのコリヤ・ブラッハー、チェロのマリオ・ブルネロ、ナターリャ・グートマン、ハーゲン弦楽四重奏団員、オーボエの吉井瑞穂、ハープの吉野直子らキラ星のようなメンバーがそろい、アバドの最晩年に輝きを与えた。2016年からはリカルド・シャイーが音楽監督を務める。

## オーケストラ文化を活性化させる

非常設楽団の存在意義をスポーツに例えれば、サッカーのナショナルチームや日本のプロ野球のオールスターゲームに匹敵するのだろうか。ふだん別々のチームで活躍するスター

プレーヤーが年に何度か一つ所に召集され、ハイテンションの試合を繰り返す。ワールドカップやオールスターは一期一会、あるいは一夜限りの幻<sup>しやくおつ</sup>であっても、灼熱の体験はそれぞれのプレーヤーの心身に染み渡り、日常のチーム活動にも新たな波動と輝きを与えていく。音楽も同じで常設、非常設のオーケストラの関係は競合ではなく相互補充に本質があり、地域全体のオーケストラ文化を活性化する。いつの日か、サッカー日本代表チームに匹敵する非常設楽団が組織され、オリンピックや万国博覧会などの場で日本人が明治維新の洋楽本格導入以来150年、極東の島国で育んできたオーケストラ芸術の精髓を世界に問うような機会にも遭遇してみたい。

## 文 | 池田卓夫

音楽ジャーナリスト。1958年東京生まれ。1981年に早稲田大学政治経済学部を卒業してから2018年まで日本経済新聞社に勤務、同年10月よりフリー。音楽の執筆は高校生で始めた。

# Overview

## 10月定期公演

### ブロムシュテットが作り出す 2つの交響曲のハーモニー

10月の定期公演は桂冠名誉指揮者のヘルベルト・ブロムシュテットが3つのプログラムを指揮する。いずれのプログラムでも、2つの交響曲が組み合わされている。

Aプロはモーツァルトの《交響曲第38番「プラハ」》とブルックナーの《交響曲第9番》。メヌエット

楽章を欠くモーツァルト、作曲者の死により終楽章が完成されなかったブルックナー。どちらも3つの楽章を持つ交響曲である。ブルックナーの第3楽章アダージョは深い余韻を残してくれることだろう。

Bプロはベートーヴェンの《交響曲第6番「田園」》とステンハンマルの《交響曲第2番》。ステンハンマルはスウェーデンの作曲家。マエストロは自らとルーツを同じくするステンハンマル作品を各地のオーケストラでたびたび取り上げている。《交響曲第2番》は民謡風の明快な旋律にあふれた傑作。《田園》とも相通ずる自然賛歌的な性格を持つ。

Cプロではハイドンの最後の交響曲である《交響曲第104番「ロンドン」》とマーラーの最初の交響曲である《交響曲第1番「巨人」》が並べられる。ハイドンにおける完成された様式美と、新時代への扉を開くマーラーの野心作。2つの作品が鮮やかなコントラストを描く。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

## A

10/13 土 6:00pm

10/14 日 3:00pm

NHKホール

モーツァルト／交響曲 第38番 二長調 K.504「プラハ」

ブルックナー／交響曲 第9番 二短調(コールス校訂版)

指揮: ヘルベルト・ブロムシュテット

## B

10/24 水 7:00pm

10/25 木 7:00pm

サントリーホール

ベートーヴェン／交響曲 第6番 へ長調 作品68「田園」

ステンハンマル／交響曲 第2番 短調 作品34

指揮: ヘルベルト・ブロムシュテット

## C

10/19 金 7:00pm

10/20 土 3:00pm

NHKホール

ハイドン／交響曲 第104番 二長調 Hob.I-104「ロンドン」

マーラー／交響曲 第1番 二長調「巨人」

指揮: ヘルベルト・ブロムシュテット

PROGRAM

A

Concert No.1891 **NHK Hall**

**September**

**15(Sat) 6:00pm**

**16(Sun) 3:00pm**

conductor | **Paavo Järvi**

soprano | **Anna Lucia Richter\***

concertmaster | **Fuminori Maro Shinozaki**

**Johann Strauss II**  
“Die Fledermaus”, operetta-  
Overture [ 9’]

**Johann Strauss II**  
“Rosen aus dem Süden”,  
waltz op.388 [ 9’]

**Johann Strauss II**  
“Im Krapfenwald’l”, polka op.336  
[ 5’]

**Johann Strauss II**  
“Kaiser-Walzer”, op.437 [ 12’]

**Josef Strauss**  
“Delirien”, waltz op.212 [ 8’]

— intermission —

**Gustav Mahler**  
Symphony No.4 G major\* [ 54’]

- I Bedächtig. Nicht eilen
- II In gemächlicher Bewegung. Ohne Hast
- III Ruhevoll: Poco adagio
- IV Sehr behaglich

## Artist Profiles

### Paavo Järvi, conductor



The Estonian conductor Paavo Järvi commences his fourth season as Chief Conductor of the NHK Symphony Orchestra and is also Artistic Director of The Deutsche Kammerphilharmonie Bremen since 2004.

Commencing from the 2019/20 season Järvi will be Chief Conductor and Music Director of the Tonhalle-Orchester Zürich, while he concluded his highly successful tenure as Music Director of the Orchestre de Paris in Summer 2016. He is also Conductor Laureate of the Frankfurt Radio Symphony



and Music Director Laureate of the Cincinnati Symphony Orchestra. In addition to his permanent positions, Järvi is in much demand as a guest conductor, appearing regularly with the Berliner Philharmoniker, Münchner Philharmoniker, London's Philharmonia, Staatskapelle Berlin and Staatskapelle Dresden. Other guest engagements include the Royal Concertgebouw Orchestra, Wiener Philharmoniker, New York Philharmonic and Teatro alla Scala in Milan.

He is a dedicated supporter of Estonian composers and Artistic Adviser to the Estonian National Symphony Orchestra. Each season concludes with a week of performances and master-classes at the Pärnu Music Festival in Estonia, which was founded by Paavo Järvi in 2011. As a festival celebrating the orchestra at its heart, he created the Estonian Festival Orchestra which has become the uncontested highlight of the summer season. He was awarded the Order of the White Star by the President of Estonia in 2013 for his outstanding contribution to Estonian culture.

With an extensive discography, Paavo Järvi has won a Grammy Award for his recording of Sibelius' Cantatas and was named Artist of the Year by both Gramophone and Diapason magazines. He has also been appointed Commandeur de L'Ordre des Arts et des Lettres by the French Ministry of Culture for his contribution to music in France and the Sibelius Medal for his work in bringing attention to the Finnish composer's music during his tenure with the Orchestre de Paris.

Born in Tallinn, Estonia, Paavo Järvi studied percussion and conducting at the Tallinn School of Music. In 1980, he moved to the USA where he continued his studies in the 80s at the Curtis Institute of Music and at the Los Angeles Philharmonic Institute with Leonard Bernstein.



15 & 16, SEP 2018

---

## Anna Lucia Richter, soprano



German soprano Anna Lucia Richter was born in Cologne to a father who was a violinist, and a mother who was an alto singer from whom she started to learn singing at the age of 9. In 2012, she won the International Robert-Schumann Contest in the female voice category in Zwickau, and in 2013, she completed her singing studies at the Hochschule für Musik Köln. She enjoyed success in her recital held at London's Wigmore Hall in March 2014 and three recitals at New York's Park Avenue Armory in October the same year, where she made her American debut. In July 2015, she made her first appearance in the Salzburg Festival. Since then, she has been appearing in not only recitals, but also in concerts as well as operatic performances from Baroque to contemporary.

Her outstanding vocalization, crystalline, fresh and beautiful voice, intelligence-driven singing and controlled passion are balanced to perfection in her singing, and instantly attract her audiences. Mahler's 4th symphony's soprano solo is one of her favorites, a work she sang under Bernard Haitink with the London Symphony Orchestra on its Japan tour in September 2015.



This is her first appearance with the NHK Symphony Orchestra.

[Anna Lucia Richter by Koji Yoshida, music critic]

---

## Program Notes | Akira Ishii

---

Johann Strauss II, often called “the Waltz King,” wrote altogether more than five-hundred dance pieces, many becoming tremendously popular in Vienna in the second half of the nineteenth century. Today, Strauss II’s compositions are favored by just about everyone around the globe. The annual broadcast of the New Year’s concert by the Wiener Philharmoniker, which always features a large number of Strauss II’s compositions, remains one of the most widely viewed classical music television programs.

The majority of the compositions Strauss II wrote were either waltzes or polkas. In addition, he also composed a significant number of operettas, of which *Die Fledermaus* (*The Bat*) is undoubtedly best known. Today, the work is part of the standard repertoire of most, if not all, opera houses around the world.

Josef Strauss was the brother of Johann Strauss II and Eduard Strauss. Josef was taught to be an engineer at first. Upon finishing his vocational training, he began working for the city of Vienna. In his mid-twenties, however, he changed his profession and became a composer-musician. Throughout his career, he wrote altogether nearly three hundred pieces; most were dance compositions like waltzes, polkas, and quadrilles.

---

### Johann Strauss II (1825–1899)

---

## “Die Fledermaus”, operetta–Overture

*Die Fledermaus* (*The Bat*) is the third of the fifteen operettas Strauss II completed. The work premiered on April 5, 1874 in Vienna. The operetta quickly became popular among not just the Viennese public but also music lovers in numerous cities in Europe as well as in the United States. The overture is full of a variety of melodies—some are adorable and endearing, the others, sorrowful and touching.

---

### Johann Strauss II (1825–1899)

---

## “Rosen aus dem Süden”, waltz op.388

Strauss II composed the waltz *Rosen aus dem Süden* (*Roses from the South*) in 1880. The piece contains melodies from *Das Spitzentuch der Königin* (*The Queen’s Lace Handkerchief*), an operetta Strauss II wrote in the same year. The waltz remains popular today and is frequently performed at the New Year’s Concert by Wiener Philharmoniker.

## “Im Krapfenwald’l”, polka op.336

The polka *Im Krapfenwald’l* (*In Krapfen’s Woods*) was composed in 1869 and was originally titled *Im Pawlowsk Walde* (*In the Pavlovsk Woods*). This was the result of Strauss II’s receiving a commission to write a dance piece for a railroad company in Pavlovsk, Russia. The first performance of the polka indeed took place at a train station in Pavlovsk. The composer changed its title to the current name when he introduced the composition to the Viennese audience.

### Johann Strauss II (1825–1899)

---

## “Kaiser-Walzer”, op.437

*Kaiser-Walzer* (*EmperorWaltz*) is one of Strauss II’s late works and was composed in 1889. Just like the *Im Krapfenwald’l* (*In Krapfen’s Woods*) polka, this waltz too had a different name. The piece was originally called “Hand in Hand” Waltz because both Austrian Emperor Franz Joseph and German Kaiser Wilhelm II were scheduled to attend its premiere, which occurred in Berlin on October 21, 1889. The waltz was intended to symbolize a friendly relationship between Austria and Germany. While the piece was being prepared for publication, however, the publisher insisted on an alternative name because it was thought that the original title denoted the two monarchs equally, thus possibly dishonoring the Austrian emperor (Strauss II resided in the Austrian capital).

*Kaiser-Walzer* begins with a march-like introduction marked “Langsames Marschtempo (tempo of slow march).” The first waltz of the piece appears after beautiful and elegant cello solo.

### Josef Strauss (1827–1870)

---

## “Delirien”, waltz op.212

The waltz *Delirien* (*Delirium*) was composed by Josef Strauss for the Medical Students’ Ball held in Vienna on January 22, 1867. Immediately after its premiere, the piano reduction of the piece was published. The edition was dedicated to the medical students at the University of Vienna. The waltz *Delirien* begins with a brief introduction, which is rather different from that of a typical Viennese waltz. It lacks a clear thematic statement or easily recognizable melody. Instead, the section sounds as if the orchestra is mimicking dramatic scenes from operas or ballets.

### Gustav Mahler (1860–1911)

---

## Symphony No.4 G major

Mahler’s Symphony No. 4 was composed between 1899 and 1901. Its premiere took place in Munich on November 25, 1901, with the composer himself conducting the Kaim-Orchester, today’s Münchner Philharmoniker.

The symphony is scored for a large orchestra. It calls for four flutes (the third and fourth

doubling piccolos), three oboes (the third doubling English horn), three clarinets (the second doubling E-flat clarinet and the third, bass clarinet), three bassoons (the third doubling contrabassoon), four French horns, three trumpets, four timpani, a bass drum, cymbals, a triangle, sleigh bells, a tam-tam, a glockenspiel, a harp, and strings. In addition, a soprano solo voice is introduced in the final movement. Despite the size of the ensemble, Symphony No. 4 is one of the quietest of Mahler's symphonic pieces. In the first movement, for instance, the trumpets, the instruments that are typically employed to produce a loud sound, only appear in a small portion of the movement (approximately one sixth of the movement that comprises over three hundred fifty measures). Moreover, many of the trumpet notes are marked piano. For the rest of the symphony, Mahler keeps this manner of orchestration until the very last note.

The reason why Mahler maintains the serene sonority throughout Symphony No. 4 is strongly related to his decision to quote in the last movement *Das himmlische Leben* (*The Heavenly Life*), a song Mahler wrote in 1892. The piece, sung by a soprano solo, is about a child's vision of Heaven. The text opens with the following lines: "We enjoy heavenly pleasures and therefore avoid the earthly stuff. No worldly turmoil is to be heard in heaven." Even from this much of the first strophe of the text one can easily see that it was important for Mahler to depict a feeling of innocence not just in the finale but also in the other movements. Mahler indeed incorporates thematic materials from the song throughout the entire symphony to maintain the heavenly atmosphere.

## Akira Ishii

Professor at Keio University. Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

B

## Concert No.1893 Suntory Hall

September

26 (Wed) 7:00pm

27 (Thu) 7:00pm

conductor | Paavo Järvi | for a profile of Paavo Järvi, see p.56

horn | Radek Baborák

concertmaster | Fuminori Maro Shinozaki

## Franz Schubert

## Symphony No.3 D major D.200 [ 26' ]

I Adagio maestoso—Allegro con brio

II Allegretto

III Menuetto: Vivace—Trio

IV Presto vivace

## Richard Strauss

Horn Concerto No.2 E-flat major  
[ 19' ]

I Allegro

II Andante con moto

III Rondo: Allegro molto

— intermission —

## Ludwig van Beethoven

“Die Geschöpfe des Prometheus”,  
ballet op.43—Overture [ 5' ]

## Franz Joseph Haydn

Symphony No.102 B-flat major  
Hob.I-102 [ 24' ]

I Largo—Vivace

II Adagio

III Menuetto: Allegro—Trio

IV Finale: Presto

## Artist Profile

## Radek Baborák, horn



Radek Baborák is a horn player at the forefront of the world music scene today. It is no exaggeration to say that with his extraordinarily superb playing technique, mellow tones and subtle expression, he has changed the entire image of the horn.

He was born in what was then Czechoslovakia in 1976, and started learning horn at the age of eight. He then studied at the Prague Conservatoire with Bedřich Tylšár. He was only 18 years old when he was appointed principal horn of the Czech Philharmonic. Then after serving as principal horn

B

26 &amp; 27 SEP 2018

player of the Münchner Philharmoniker, he held the post of principal horn player of the Berliner Philharmoniker from 2003 to 2010. He also appeared as a soloist with the orchestra. Since leaving the orchestra, he has been vigorously working as a soloist as well as performing chamber music. At the same time, he has fully developed his career as a conductor, leading the Czech Sinfonietta, an ensemble he founded. He made his conducting debut in Japan with the Mito Chamber Orchestra in its subscription concert in 2013, and was named Principal Guest Conductor of the Yamagata Symphony Orchestra from the 2018 season.

With the NHK Symphony Orchestra, he performed Glière's Horn Concerto under Vladimir Ashkenazy in 2012, which was voted by audience "The Most Memorable Soloist of the Year in 2012." In 2015, he played Horn Concertos No.1 by Mozart and R. Strauss under Andris Poga.

[Yoichi Iio, music journalist]

---

## Program Notes | Akira Ishii

---

### Franz Schubert (1797–1828)

---

## Symphony No.3 D major D.200

Schubert was only eighteen years old when he completed Symphony No. 3. At that time, he was already working as a school teacher but was still studying composition with Antonio Salieri, a well-known opera composer and Kapellmeister at the Viennese Court. There is no clear record of the premiere of the symphony. It is highly plausible that the composition was never performed by professional musicians at a public concert during Schubert's life time. The first known public performance of the symphony took place in London on February 19, 1881.

Symphony No. 3 is scored for a full-scale orchestra of the time, calling for strings and a pair each of flutes, oboes, clarinets, bassoons, French horns, trumpets and drums. It is not a lengthy work in comparison with Schubert's other similar pieces. Nevertheless, the composition comprises four movements that are typically included in the symphonies of the late eighteenth and early nineteenth centuries. The first movement begins with a short introduction that produces a bright and pleasant tone that remains throughout the whole symphony. After the monotonously sounding first note marked with a *fermata*, the woodwinds in the high register repeat the same notes in *tremolo*. These, together with violins playing scale-like figures, create an innocent and tranquil sonority, which immediately invites the listener to a heavenly atmosphere. The last movement of Symphony No. 3 foresees the finales of Schubert's later compositions. In such movements, the composer writes continuously moving fast notes to maintain the mood of "quickness." The best example of this type of closing movement is the finale of the C-major "Great" symphony. Similarities between the final movement of the last symphony Schubert completed and that of Symphony No. 3 are easily audible.

## Horn Concerto No.2 E-flat major

Richard Strauss was a diligent and prolific composer. He was already writing music when he was six years old and did not stop composing until he died at the age of eighty-five. Perhaps Strauss' best-known compositions are his tone poems. Most are very popular today and are frequently performed. These orchestral works include *Don Juan*, Op. 20; *Till Eulenspiegels lustige Streiche* (*Till Eulenspiegel's Merry Pranks*), Op. 28; *Also sprach Zarathustra* (*Thus Spoke Zarathustra*), Op. 30; and *Ein Heldenleben* (*A Hero's Life*), Op. 40. After writing his last tone poem in 1898, however, Strauss composed mostly operas. *Salome* premiered in 1905; *Elektra*, in 1909; and *Der Rosenkavalier* (*The Knight of the Rose*), in 1911. The last opera Strauss completed was *Capriccio*, composed between 1940 and 1941.

During his life Strauss wrote only a small number of concertos for a solo instrument and orchestra. The majority of such works were composed before he began creating tone poems. Among them Horn Concerto No. 1 in E-flat major, Op. 11 is probably best known. The composer had been inspired by his father Franz Strauss, a principal French horn player at the Court Opera Orchestra in Munich, to write a concerto for his father's instrument. Approximately sixty years went by before Strauss had an opportunity to write another concerto for the French horn. Horn Concerto No. 2 was completed in 1942 and was performed for the first time on August 11, 1943.

Horn Concerto No. 2 is an extremely difficult piece to play. Only those horn players who are equipped with extraordinary performance skills can execute the highly demanding passages in it. Consequently, the composition has become one of the most frequently requested pieces at horn competitions. The work consists of three movements, of which the first and second are played without interruption.

## Ludwig van Beethoven (1770–1827)

### “Die Geschöpfe des Prometheus”, ballet op.43–Overture

*Die Geschöpfe des Prometheus* (*The Creatures of Prometheus*), Op. 43 is a ballet, consisting of an overture and seventeen dances. Beethoven composed the work between 1800 and 1801, and its premiere took place in March 1801 at the Burgtheater in Vienna. It is a long composition and takes nearly an hour to perform. Today, however, a concert-goer would rarely have an opportunity to hear the entire piece being played in concert. Its overture, on the other hand is favored by both musicians and audience alike and is frequently performed. Detaching the overture from the rest of the composition is not at all an awkward practice. Much of it, after all sounds quite unrelated to the plot of the ballet.

After the overture, *Die Geschöpfe des Prometheus* opens with a brief introduction that depicts a fiery storm. The movement symbolizes the Greek god Prometheus and his actions described in Greek mythology (Prometheus created man from clay and gave fire to humanity).

Beethoven seems to have liked the music he set to the ballet; he reused some of its thematic materials for his later compositions. The main melody of the finale of the ballet, for instance, was adopted into the composer's Variations and Fugue for Piano in E-flat major, Op. 35 (*The Eroica Variation*). This keyboard piece itself served as the basis for the final movement of Symphony No. 3 in E-flat major, Op. 55 *Eroica*.

## Symphony No.102 B-flat major Hob.I-102

After working for nearly thirty years at the court of a Hungarian wealthy aristocratic family, Haydn was released from his duties in 1790, enabling him to enjoy freedom. This was quite significant for a non-aristocratic member of society near the end of the eighteenth century, a period marked by the French and American Revolution. Haydn no longer needed, for instance, to obtain permission to travel or even write a piece of music for anyone besides his patron.

Haydn's compositions, however, had been widely circulated well before he retired from the post of Kapellmeister. Over the years Haydn's reputation had spread, and to some extent his employer had tolerated or overlooked Haydn selling his compositions. Upon the termination of employment (with a handsome retirement pension), however, Haydn was finally able to freely sell his works to anyone who wished to have them, including publishers of economically developed cities in Europe. The demand for Haydn's compositions was indeed high.

Invited by Johann Peter Salomon, a German violinist and impresario living in London, Haydn visited the British capital for the first time in 1791. For this journey Haydn wrote six symphonies (Symphonies Nos. 93–98). They were very well-received, prompting Salomon to bring Haydn back for another concert season. In 1794, the composer was once again in London. This second trip was also fruitful for Haydn, composing six new symphonies. Symphony No. 102 is one of these later “London” compositions.

Among the six symphonies Haydn composed for his second visit to London, four are known by their nicknames—No. 100, *Military*; No. 101, *The Clock*; No. 103, *Drumroll*; and No. 104, *London*. The names may have helped these symphonies become popular today. Symphony No. 104, in particular, is in fact one of the most frequently performed pieces of Haydn's *oeuvre*. Symphony No. 102, on the other hand, is relatively unknown but is undoubtedly a masterfully written composition of Haydn's.

C

Concert No.1892 **NHK Hall****September****21(Fri) 7:00pm****22(Sat) 3:00pm**conductor | **Paavo Järvi** | for a profile of Paavo Järvi, see p.56soprano | **Johanna Rusanen\***baritone | **Ville Rusanen\***male chorus | **Estonian National Male Choir (Mikk Üleoja, chorus master)**concertmaster | **Ryotaro Ito**

Under the auspice of: Embassy of the Republic of Estonia



C

**Jean Sibelius**  
**“A Song for Lemminkäinen”,**  
**op.31-1 [ 4’]**

**Jean Sibelius**  
**“Sandels”, op.28 [ 9’]**

**Jean Sibelius**  
**“Finlandia”, tone poem op.26**  
**(Version for Male Chorus and Orchestra)**  
**[ 8’]**

— intermisson —

**Jean Sibelius**  
**“Kullervo”, op.7\*[78’]**

- I Introduction
- II Kullervo's Youth
- III Kullervo and His Sister
- IV Kullervo goes to Battle
- V Kullervo's Death

21 &amp; 22. SEP. 2018



## Johanna Rusanen, soprano



Johanna Rusanen, soprano, was born in Kuopio, Finland. After studying at Sibelius Academy, Helsinki, she pursued her studies in Berlin in the Young artists Program at the Deutsche Oper Berlin for two years from 1998. In 1996, she won the Lappeenranta Solo Voice Competition. With her intense but warm voice, she has been taking up roles of dramatic soprano in recent years, singing the title role of Puccini's *Turandot* in 2013, and the role of Isolde of Wagner's *Tristan und Isolde* in 2016, both for the first time, at the Finnish National Opera. She frequently appears in operas by Finnish composers, as well as in concerts and recitals singing operatic pieces and lieder. In addition, she also enjoys singing popular music, making her a household name in the Finnish media including television. Sibelius' *Kullervo* is one of her trademark songs, which she has been singing for more than 20 years around the world, a work she also sang alongside her brother Ville Rusanen at the Grant Park Music Festival in Chicago in 2011 and the Savonlinna Opera Festival in Finland in 2017. This is her first collaboration with the NHK Symphony Orchestra.

## Ville Rusanen, baritone



Finnish baritone and the winner of the 2004 Lappeenranta Solo Voice Competition, Ville Rusanen, studied singing at the Sibelius Academy, Helsinki. He is one of frequent faces in the Finnish National Opera ever since his debut there in 2005 when he sang the role of Figaro in Rossini's *Il Barbiere di Siviglia*. Papageno of Mozart's *Die Zauberflöte* is also the work he often sings there. He started his career internationally by singing Guglielmo of Mozart's *Così fan tutte* at the Scottish Opera in 2009. He appeared in the world premiere performance of *A Dog's Heart*, a new opera by Alexander Raskatov, singing the role of Bormenthal, in Amsterdam, the Netherlands, in 2010. He sang the same role at La Scala, Milan in 2013, and at the Opéra National de Lyon in 2014. He has sung Sibelius' *Kullervo* under the baton of Vladimir Ashkenazy in Sydney, and with the RTE National Symphony Orchestra in Dublin in the 2012/13 season. He also appeared together with Johanna Rusanen, his sister, to sing the same work at Grant Park Music Festival in Chicago in 2011 and the Savonlinna Opera Festival in Finland in 2017. This is his debut with the NHK Symphony Orchestra.

## Estonian National Male Choir, male chorus

The Estonian National Male Choir (RAM) was founded in 1944 by Estonian composer Gustav Ernesaks, and has since been fostered by choral conductors such as Olev Oja,

Kuno Areng, Ants Üleoja, Ants Soots and Kaspars Putniņš. Mikko Üleoja has been the Chief Conductor and Artistic Director since 2011. The choir enjoys quite a large repertoire ranging from church music and classical to modern and contemporary choral works, including those composed by Estonian composers, as well as folk songs and ethnic music. The chorus also has given premiere performances of many works, some of which the chorus itself has commissioned. In 2006, it made headlines by working with Metsatöll, an Estonian folk metal band. Over the years, the Estonian National Male Choir has made many world concert tours, frequently visiting cities in the former Soviet Union and elsewhere in Europe, as well as in North America and Asia. The chorus has worked with Estonian conductor Paavo Järvi on many occasions and took part in the CD production of *Kullervo* which Paavo Järvi conducted in 1997. The recording of Sibelius Cantatas that they worked on together in 2002 received the 2003 Grammy Award for Best Choral Performance. This is their first collaboration with the NHK Symphony Orchestra.

[Johanna Rusanen, Ville Rusanen, Estonian National Male Choir by Koji Yoshida, music critic]

---

## Program Notes | Akira Ishii

---

The late nineteenth and the early twentieth centuries was a glorious era for Scandinavian music. It was not, however, the first time for the region to experience a blossoming of musical culture. Not generally recognized today, Sweden had a strong interest in music in the seventeenth and eighteenth centuries. The Kingdom of Sweden possessed tremendous wealth and power, and the Swedish Royal Court was able to maintain well-established orchestras and opera houses. In remote areas of the Scandinavian peninsula, on the other hand, high art music was never fully developed. The nationalism movement of the nineteenth century, however, helped change the situation. Small states, provinces, or occupied territories under the rule of dominating powers began re-evaluating their identity and often longed for independence. As a result, composers like Jean Sibelius were able to pay attention to their own heritage like no musicians of the past could have ever done.

Jean Sibelius was an influential figure in his home country and is often credited to have helped the development of Finnish national identity when Finland was struggling for independence from Russia. Sibelius composed seven symphonies, of which some have become quite popular and are frequently played and recorded. Other well-known compositions by Sibelius include Violin Concerto, Op. 47, *Finlandia*, Op. 26, and *Kullervo*, Op. 7.

### Jean Sibelius (1865–1957)

---

## “A Song for Lemminkäinen”, op. 31–1

*A Song for Lemminkäinen*, written for male chorus and orchestra, premiered in December, 1896. The work was later published as the first of *Three Songs for Male Chorus and Orchestra*, Op. 31. Lemminkäinen is a heroic figure in *Kalevala*, an epic poem inspired by Finnish mythology. The text, however, is not from *Kalevala*—it was newly written by Yrjö Weijola. Portions of *A Song for Lemminkäinen* come from the original version of *Lemminkäinen's Return*, the final movement of *Lemminkäinen Suite* (or *Four Legends from the Kalevala*), Op. 22.

## “Sandels”, op. 28

Sibelius composed *Sandels* in 1898 for a composition competition for which he won a prize. The first performance of the work took place in Helsinki on March 16, 1900. The text is based on a poem about Count Johan August Sandels, a real life commander of the Swedish Army in the early nineteenth century. The poem depicts Sandels’ defeat of the Russian Army in 1808 during the Russo-Finnish War. The victory made Sandels a hero; however, the poem tells the story in a rather comical manner, which is reflected in Sibelius’ composition.

## “Finlandia”, tone poem op.26 (Version for Male Chorus and Orchestra)

*Finlandia* was composed in 1899 and revised in 1900 when Finland bore the oppression from the Russian Empire. Sibelius wrote the tone poem for a secretive gathering, the purpose of which was to protest against Russian censorship Finnish politics and ideology. The premiere on July 2, 1900 in Helsinki was performed by the Helsinki Orchestral Society. Towards the end of the tone poem Sibelius writes a serenely melody, which the composer later made into an independent hymn. This, known as *Finlandia Hymn*, has been touching many people in Finland, and the tone poem *Finlandia* is sometimes performed with a male chorus singing the hymn. This male chorus and orchestra version clearly brings out nationalistic feelings attached to the tone poem.

## “Kullervo”, op.7

*Kullervo* is one of Sibelius’ early works. It is a composition for orchestra and voices. Some people regard the piece as a symphony, often referring to it as a “choral symphony.” The composer, however, never called it such. He in fact categorized the work as a “tone poem.” It premiered in Helsinki on April 28, 1892, with Sibelius himself conducted the newly founded Helsinki Orchestral Society. *Kullervo* has five movements, of which the third and fifth feature voices. A male chorus is called for in both of these two movements, while the third is also scored for soprano solo and baritone solo.

The five movements in *Kullervo* are titled: “Introduction,” “Kullervo’s Youth,” “Kullervo and His Sister,” “Kullervo goes to Battle,” and “Kullervo’s Death.” The tone poem features a text drawn from chapters between thirty-one and thirty-six of *Kalevala*, depicting the tragic character of Kullervo. Before Kullervo was born his family except for his mother is slain. When he is still young, he is sold into slavery. After he gains freedom, he falls love with a girl, who turns out to be his own sister. In the third movement of Sibelius’ tone poem, soprano represents Kullervo’s sister while baritone, Kullervo.



公演報告

2018年  
05月  
定期公演

SUBSCRIPTION CONCERTS  
IN MAY, 2018

首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィがタクトを執った5月定期公演。  
シベリウス《4つの伝説》やブルックナー《交響曲第1番》に加え、  
オール・ストラヴィンスキー・プログラム、  
テツラス、トラーゼをソリストに迎えた協奏曲など、  
多彩かつ聴き応えのある曲目を披露しました。

**Aプログラム** ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61、シベリウス／交響詩「4つの伝説」作品22 (2018年5月12日、13日、NHKホール) **Bプログラム** ストラヴィンスキー／バレエ音楽「ミュースの神を率いるアポロ」、バレエ音楽「カルタ遊び」、3楽章の交響曲(2018年5月23日、24日、サントリーホール) **Cプログラム** トルミス／序曲 第2番(1959)、ショスタコーヴィチ／ピアノ協奏曲 第2番 へ長調 作品102、ブルックナー／交響曲 第1番 ハ短調(1866年リント稿／ノヴァーク版)(2018年5月18日、19日、NHKホール)



(左)今回A・B・Cすべてのプログラムを指揮したパーヴォ・ヤルヴィ  
(右)Aプロのベートーヴェン《ヴァイオリン協奏曲》でソリストを務めたクリスティアン・テツラフ(いずれも5月12日)

Bプロのストラヴィンスキー《3楽章の交響曲》。ピアノを梅田朋子が、ハーブを早川りさこが務めた(5月23日)



(右) Cプロのショスタコーヴィチ《ピアノ協奏曲第2番》でソリストを務めたアレクサンドルトラーゼ(5月18日)  
(下) Cプロのブルックナー《交響曲第1番》(5月18日)







公演報告

2018年  
06  
定期公演

月

SUBSCRIPTION CONCERTS  
IN JUNE, 2018

昨シーズン最後を飾った6月定期公演は、注目度の高い曲目がずらり。

A・Cプログラムに登場したウラディーミル・アシュケナージは

ドビュッシー没後100年を記念したプログラムや

メンデルスゾーンの協奏曲と東欧の作品を組み合わせた演目を披露。

Bプログラムでは、尾高忠明がロシア・プログラムを指揮しました。

**Aプログラム** イベール／祝典序曲、ドビュッシー／ピアノと管弦楽のための幻想曲、牧神の午後への前奏曲、交響詩「海」(2018年6月9日、10日、NHKホール) **Bプログラム** カバレフスキー／チェロ協奏曲 第2番 ハ短調 作品77 (1964)、チャイコフスキー／交響曲 第5番 ホ短調 作品64 (2018年6月20日、21日、サントリーホール) **Cプログラム** メンデルスゾーン／ヴァイオリンとピアノのための協奏曲 二短調、ヤナーチェク／タラス・ブリーバ、コダーイ／組曲「ハーリヤーノシュ」(2018年6月15日、16日、NHKホール)



(左)A・Cプログラムで指揮を執ったウラディーミル・アシュケナージ(6月15日)  
(右)Aプロのドビュッシー《ピアノと管弦楽のための幻想曲》でソリストを務めた  
ジャン・エフラム・バヴゼ(6月9日)

(左)Bプロの指揮を執った  
尾高忠明  
(右)Bプロのカバレフスキー  
《チェロ協奏曲第2番》でソリス  
トを務めたマリオ・ブルネロ(いず  
れも6月20日)



Bプロのチャイコフスキー  
《交響曲第5番》(6月20日)



Cプロのメンデルスゾーン  
《ヴァイオリンとピアノのための  
協奏曲》。ヴァイオリン・ソ  
ノを庄司紗矢香、ピアノ・ソノ  
をヴィンガー・オラフソンが  
務めた(6月15日)

第66回尾高賞を受賞した坂田直樹《組み合わせられた風景》。ビニール袋など多様な素材が用いられた



## 公演報告

# Music Tomorrow 2018

2018年6月26日、東京オペラシティ コンサートホール

Music Tomorrow は、N響が1952年に創設した「尾高賞」受賞作品と

N響委嘱作品の世界初演を中心に、同時代の音楽を集めるコンサートです。

今回はイギリス現代作品と組み合わせられ、ステファン・アズベリーの指揮で演奏されました。

鈴木純明／リュベックのためのインヴェンションⅢ「夏」(2018) [NHK交響楽団委嘱作品・世界初演]、坂田直樹／組み合わせられた風景 (2016) [第66回尾高賞受賞作品]、ジェームズ・マクミラン／オーボエ協奏曲 (2010) [日本初演]、コリン・マシューズ／ターニング・ポイント (2006) [日本初演]  
指揮：ステファン・アズベリー、オーボエ：フランソワ・ルルー



(左) コンサート前に行われたプレトークの様子。左から、白石美雪 (司会、音楽評論家)、坂田直樹、鈴木純明  
(右) ジェームズ・マクミラン (オーボエ協奏曲) でソリストを務めたフランソワ・ルルー